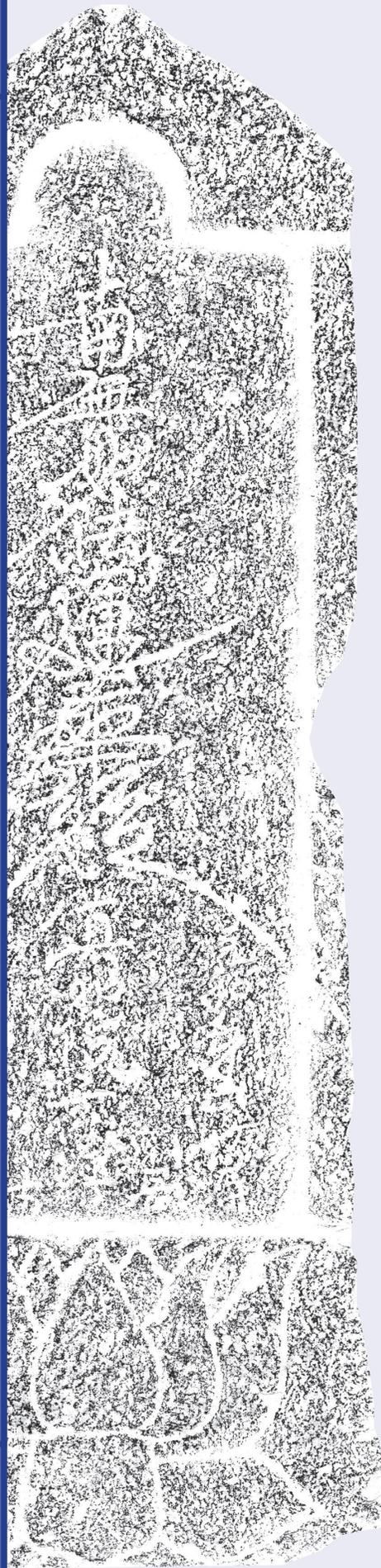


第9回特別展

近世の墓石と墓誌を探る

立正大学博物館



ごあいさつ

平成 26 年度の特別展として、近世の墓石と墓誌をとりあげました。立正大学博物館に所蔵されている資料は、文学部考古学研究室が長年収集してきた資料が主体を占めています。この資料の中には、古代から近世に至る多くの墳墓関連資料が含まれており、平成 21 年には第 6 回特別展として「題目板碑の世界」、平成 22 年には第 7 回企画展として「古代・中世の武蔵国の骨蔵器」を企画しました。今回はこの一連の企画としての位置づけで「近世の墓石と墓誌を探る」としました。

近世墓石は、地域社会の確立にともなって 17 世紀後半代に墓石の造立が定着していますが、博物館では資料収集実習の一環として各地の近世墓石の資料集成をしてきており、このうち熊谷市域の寺院境内墓地と、大田区池上本門寺境内墓地における墓石の様相をまとめました。

近世の墓誌は限定された武士・儒者に使用された貴重な資料ですが、昭和 35 年に日蓮宗善性寺の越智松平家墓地の改葬に伴って出土した資料が博物館に所蔵されており、関連資料を集成して墓誌の様相をまとめました。

今回の展示では、近世の墳墓を通じて墓石や墓誌などの物質的資料に反映した社会の様相を確認したいと思います。

平成 27 年 1 月

立正大学博物館長 池上 悟

目次

ごあいさつ／目次／凡例

はじめに	1
1. 関東地方における近世墓石	2
2. 熊谷市内における近世墓石の調査	11
3. 江戸時代の墓誌	22

凡例

- (1) 本図録は、第 9 回特別展「近世の墓石と墓誌を探る」の展示図録として作成しました。
- (2) 本図録の執筆は池上悟（当館館長）と池田奈緒子（当館学芸員）が分担し、編集は館長の指示のもと池田が担当しました。
- (3) 善性寺出土墓誌については坂誥秀一先生（当館前館長）のご教示を賜りました。
- (4) 本図録に用いた挿図の出典及び、引用・参考した文献は巻末に掲げました。
- (5) 本特別展開催にあたり、以下の方々・機関にご協力を賜りました。感謝申し上げます。
善性寺、池上本門寺、常楽寺、長慶寺、妙音寺、集福寺、熊谷市教育委員会
安藤昌就、本間岳人、大塚美紗登、神林幸太郎

はじめに

近世の墳墓は、古くから著名人の墳墓については注目されて検討されていますが、一般的な墳墓は研究の対象とはなってきませんでした。

しかし中には歴史考古学の資料として注目され、坪井良平などにより古くから研究が進められてきています。

最近では首都圏の再開発事業に伴う墓地整理、史跡整備に伴う大名墓の調査などが多く行われています。各地の大名墓や旗本墓などは史跡として整備・保存されている例も目立ちますが、一般庶民の近世墓石は文化財としての認識に乏しく保存措置がとられている例は殆どありません。

しかし、各地に広範に造立された墓石は、顕著に身分・階層・経済性を反映した貴重な物質的資料であり、文化財として調査・研究していくことが重要と思われれます。

立正大学考古学会は平成 22 年度に、最近の調査成果を踏まえて、全国各地で調査に携わった同窓生に参画していただいて「近世大名家墓所における葬制の諸問題—大名家墓所調査の現状と課題—」のシンポジウムを開催しました。

立正大学博物館では、博物館館務実習の一環としての資料収集実習として、熊谷市教育委員会の協力を得て熊谷市内の諸寺院墓地の調査、東京都大田区の日蓮宗大本山の池上本門寺境内墓地における墓石調査を進めてきました。

この成果は、『博物館年報』、『万吉だより』などで紹介してきました。今回は、従来の成果を集成して近世墓石をまとめています。

近世初期の 17 世紀代の墓石には、戦国時代からの伝統を引き継いだ墓塔としての五輪塔、宝篋印塔、無縫塔、立体形墓石としての廟墓が造立されており、さらには新たに創案された屋弛型墓標、尖頂舟形墓標などが造立者の身分・

階層に従って用いられています。

近世は江戸幕府による幕藩体制が施行された時代であり、武家では徳川將軍家を最高位として各大名が序列に従い、それぞれの藩では藩主に従属する家臣の存在が、墓石に反映されて今に遺存しています。

この意味で江戸時代の墓石は封建制度を反映した考古学的遺物であり、墓石の大きさには経済的要因も顕著に反映しています。たびたび幕府から出された大規模な墓石造立の禁止令は、有力町人の中には武家の墓石規模をしのぐ大規模墓石の造立が行われていたことを示しているものと考えられます。

將軍家の墓石には宝塔が独占的に使用されており、各大名墓ではそれぞれに特異な墓石型式を採用継続しています。

また関東地方に集中する旗本墓ではそれぞれの石高、すなわち階層に従った墓石型式の違いが確認されるところです。

今回の展示では、近世の支配者階層である武家の墓石ではなく、支配された側の農民・町人身分の墓石を扱っています。この中においても階層の違いは明確に反映しており、寛文～元禄期の墓石造立階層の広がりに従った墓石型式の変遷も、地域に特徴的なものとして確認することができます。

墓誌は、近世墓にあつては支配者階層である武士・儒者などに限定的に用いられています。江戸の武家の葬制、特に埋葬法に儒教からの影響があつた点は近時明確にされた重要な点であり、墓誌もまたその影響下に出現した点は、儒者の墓に多く墓誌が使用されている点から明らかです。今回の展示では、本館所蔵の越智松平家墳墓出土資料を中心に、関連資料を集成しました。

1. 関東地方における近世墓石

関東地方の**びょうぼ**廟墓

「廟墓」は、中世末期から近世前期にかけて、他の墓標に先だって大名から有力町人層・庶民層までに造立された立体的な墓石です。

地域によって形態や使用する石材に違いがみられますが、ほぼ全国的に分布が確認されています。「石堂」「石殿」「四十九院塔」「ラントウ」「ミヤボトケ」など、地域ごとに様々な名称で呼ばれています。

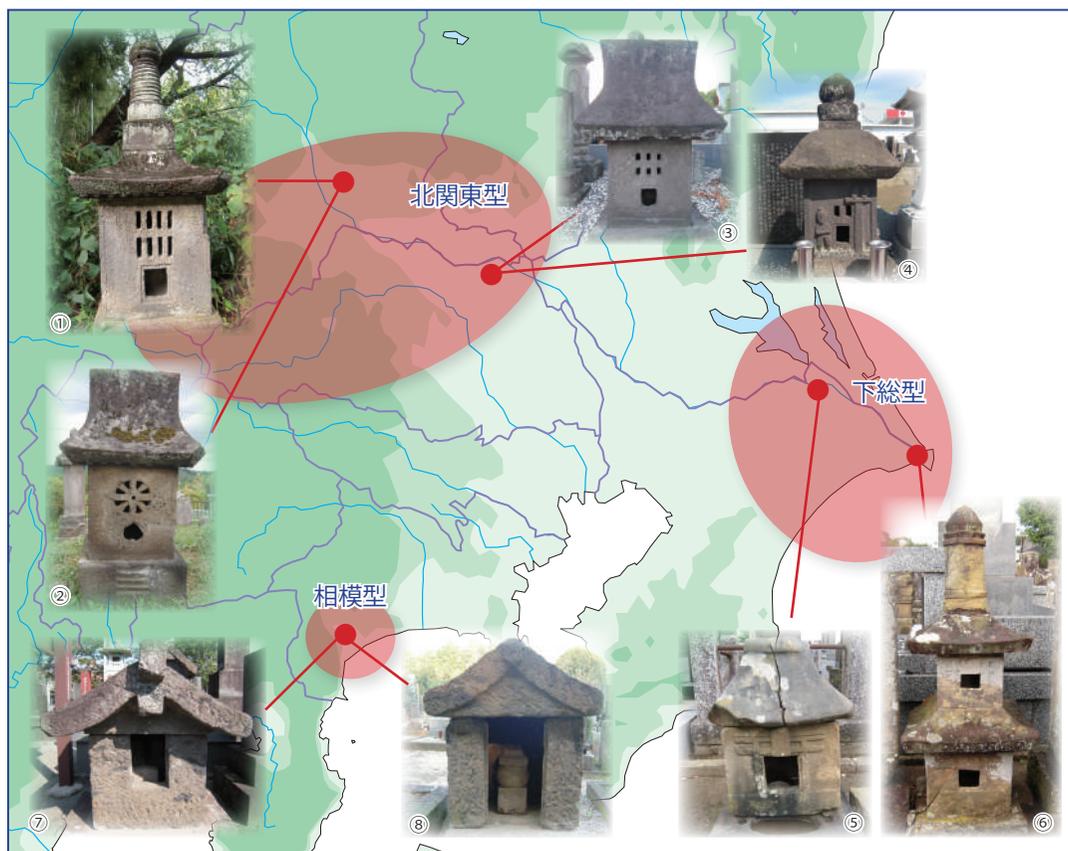
廟墓の基本的な形態は、屋根・本体・基礎の3つの部材からなる家屋構造を呈しています。屋根の構造は、切妻造り・寄棟造り・入母屋造り・宝形造りの4種類が認められます。本体は、

箱形で内側が刳り貫かれ、その内部には小形の墓塔類などが納められています。銘文は稀少ですが、本体の正面開口部の左右や本体側面に戒名や没年が刻まれることがあります。

また、後述する北関東型・下総型では、側面に塔婆の模様が刻まれるものもあり、これは弥勒信仰に基づく兜卒天の四十九院を表すものと考えられています。

関東地方においては、江戸時代初期の17世紀代を中心とする造立例が確認できます。

北関東の上野・下野地域から埼玉県北部には、安山岩を使用した宝形造りと入母屋造りの大・



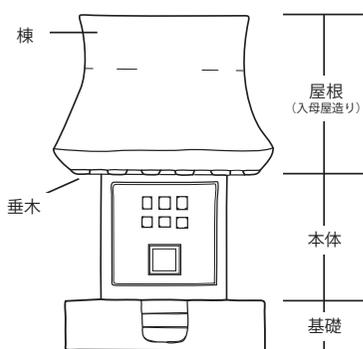
第1図 関東地方における廟墓の展開

小（5尺前後・2尺前後）の廟墓が展開しています（第1図①～④）。この系統は、群馬県に接する新潟県東部や、長野県にもみられます。廟墓の内部には、主に小形の石仏が納められています。北関東においては、逆修供養を目的とする15世紀代に造立されたものと、先祖供養あるいは墓石の性格が強くなる16世紀以降に造立されたものがあります。

下総地域では、銚子で産出する砂岩（銚子石）を使用した、寄棟平入り型式や入母屋平入り型式の小形の廟墓と、多層塔型式の廟墓が認められます（第1図⑤⑥）。特徴として、本体正面の開口部に鳥居の浮き彫りが施されています。

廟墓の内部には、小形の一石五輪塔や一石宝篋印塔が納められています（4・5頁参照）。分布域は、中世末期における銚子石使用の石塔類と同じく、下総東部から常陸南部に認められます。

相模地域の足柄平野周縁部には、屋根の形状が切妻入り型式の廟墓が展開しています（第1図⑦⑧）。石材は、大粒の角礫を含む凝灰岩（風祭石）を使用しています。他の地域に分布する廟墓とは異なり、奥行きのある造りとなっています。本体内部には、小形の一石五輪塔や石製の位牌を納める例がみられます。



第2図 廟墓の模式図（北関東型）

熊谷市内の廟墓

熊谷市内における廟墓は、北関東に分布する系統を引いています。市内の全域に廟墓の分布を確認することができます。紀年銘のわかる資料を集成すると、江戸初期の寛永年間から、中期の宝永年間に及んで造立されたことがわかります。

市内の廟墓の特徴は、本体の開口部と屋根にあります。開口部は、本体正面下部に幅10cm程の長方形を基本とする孔を開け、上部に正方形の小孔を4～6個並べるもの、猪目を模したと思われる形や、車輪のような形、円形を組み合わせた形など様々な形状の孔が認められます。

屋根は、宝形造りと入母屋造りがあります。後者の2尺程度の小形品においては、比較的古いものは棟部分が低く寄棟造りに近い形状で、時代が新しくなると、棟部分が高く角張る特徴が伺えます。



第3図 周囲に塔婆を刻む廟墓

【展示資料紹介①】

一石宝篋印塔と一石五輪塔

当館には4基の一石造りの石塔が収蔵されています。①～③は千葉県銚子市周辺における採集品で、本来は前述した廟墓の内部に納入されていたもので、16世紀末～17世紀初頭の所産と考えられます。④は注記によれば昭和30年代に浜松城跡（静岡県浜松市）で採集されたもので、15～16世紀の所産と考えられます。

①一石宝篋印塔

高さ現存17cm、幅7cm、厚さ6cm。石材は砂岩（銚子石）。反花座はなく、基礎、塔身、笠、相輪（九輪以上を欠損）からなる。

②一石五輪塔

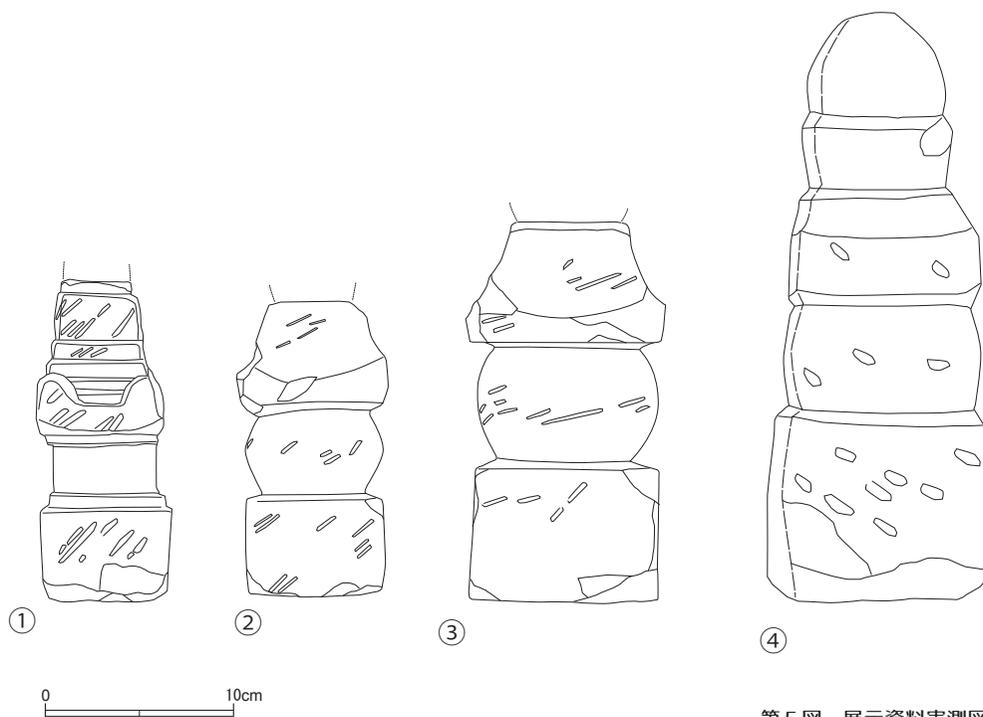
高さ現存15.8cm、幅7.2cm、厚さ7cm。石材は砂岩（銚子石）。空風輪部分は欠損している。

③一石五輪塔

高さ現存20.4cm、幅10cm、厚さ9.8cm。石材は砂岩（銚子石）。空風輪部分は欠損している。

④一石五輪塔

高さ30.5cm、幅11.5cm、厚さ11cm。石材は砂岩。



第5図 展示資料実測図



第4図 下総型廟墓における石塔の納入状況
(千葉県香取市)



第6図 展示資料写真

やだるみ

屋弛型墓標の展開

屋弛型墓標は、縦長の方形石材の頂部を尖らせ、額部を前面に突出させた特徴的な墓標です。古くは「圭頭板形碑」とも呼ばれていましたが、近時は「塔身の上に屋弛（やだるみ・軒の下から軒先までの線のたるみ）をもった切妻造りの短い屋根を乗せたような形のものである」として屋弛型墓標と呼ばれています。屋弛型墓標のなかには、正面額部下に懸魚げぎよの意匠を施したのもあり、木造建築の屋根を意図して造形されたことが伺えます。

分布は、北は福島中通りの郡山地域、西は伊豆半島の三島市域まで、確認されています。

規模は、高さ110cm前後、幅は30～45cm程度、板状石材の厚さは18～21cm程度を基準として製作されています。また、屋弛頂部に差異が認められ、その形態の変化によって分類することができます。（第7図・第8図）

相模地域の足柄平野周縁部に分布する屋弛型墓標は各類型があり、相模型廟墓と同じ角礫を多く含む凝灰岩を使用しています。相模型廟墓と時期的にも並行して造立されており、元和年間から宝暦年間までの紀年銘が確認されています。座間市や伊勢原市などの相模北東部にも若干の所在例が認められます。

静岡県三島市や伊東市に所在する屋弛型墓標は、A-2型式とC-2型式の折衷形で、額部下の懸魚をはっきりと作り出し、本体正面は杵を施し彫り窪めているのが特徴です。また、三島市域では地域性が強く、寛文年間頃の屋弛型墓標には、額部が合掌ではなく、唐破風型からはふになっているものもみられます。

江戸近郊においては、横浜市三佛寺の宅間氏墓所に2基、練馬区広徳寺の瀧川氏墓所に1基、さいたま市普門院の小栗氏墓所に1基の所在が確認されています。いずれも旗本当主墓として造立されています。



A-1



A-2



A-3



A-4



B-1



B-2

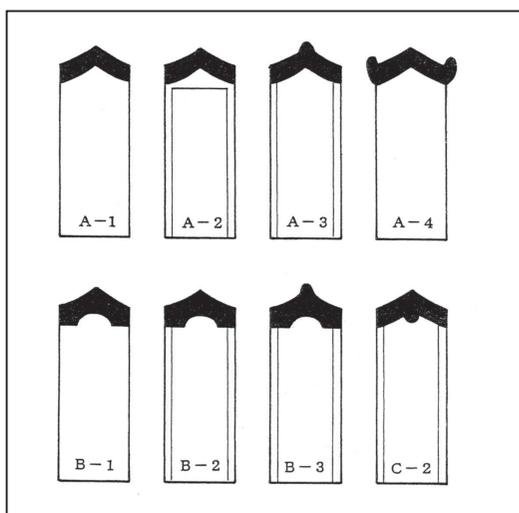


B-3



C-2

第7図 屋弛型墓標分類図(1)



第8図 屋弛型墓標分類図(2)

福島県郡山地域における屋弛型墓標は、変形例が多いものの、複数の寺院に所在しています。変形というのは、屋弛型墓標と後述する尖頂舟形墓標の折衷形で、頭部は屋弛型ですが、本体正面に尖頂舟形墓標にみられる区画と、基礎部に蓮華文の浮彫を有しています。

これらの各地に展開する屋弛型墓標を造立する宗派については、日蓮宗・真言宗・曹洞宗・臨済宗・浄土宗・浄土真宗などの寺院墓地に認められ、特定の宗派に屋弛型墓標が集中造立された状況は確認できていません。

造立年代については、紀年銘資料は A-1 型式において、慶長 18 (1613) 年より確認できますが、形態や存続期間の検討から、確実な造立は元和 3 (1617) 年以降と考えられています。



型式	特徴
A-1	頂部の中央で合掌する弛んだ額部が突出し、本体表面は平坦に仕上げる基本形。 慶長 18(1613) 年～宝暦 9(1759) 年の紀年銘が認められるが、造立は元和 3(1617) 年以降と考えられる。
A-2	頂部の額部は A-1 型式と同様であるが、本体正面に枠を施し、彫り窪める。 寛永 4(1627) 年～宝暦 4(1754) 年頃までに造立が認められる。
A-3	本体の形状は A-2 型式と同様であるが、頂部の先端が突出する。 寛永 9(1632) 年～明暦 2(1656) 年頃までに数基の造立が認められる。
A-4	ほぼ A-1 型式に類似するが、頂部の両端部が丸く上部に上がる形状。 寛文年間頃 (1660 年～) の造立が認められる。
B-1	B 型式は、額部が屋弛状ではなく、半円形の割り込みになっており、尖頂舟形墓標からの影響を看取できる。 B-1 型式の本体表面は平坦に仕上げられている。 寛永 17(1640) 年～万治元 (1658) 年頃までに造立が認められる。
B-2	頂部の額部は B-2 型式と同様であるが、本体正面に枠を施し、彫り窪める。 寛永 10(1633) 年～慶安 3(1650) 年頃の造立が認められる。
B-3	本体の形状は B-2 型式と同様であるが、頂部の先端が突出する。
C-2	C 型式は、額部の下部中央に懸魚を模したような突起を付加する形状。 本体正面に枠を施し、彫り窪める C-2 型式のみ確認されている。 慶安 3(1650) 年～宝永 7(1710) 年頃まで数基の造立が認められる。

第1表 屋弛型墓標の型式と特徴

第9図 元和3年(左)・元和5年(右)銘の屋弛型墓標
(横浜市・三佛寺)

尖頂舟形墓標の展開

尖頂舟形墓標は、近世初期から江戸を中心とする関東各地において造立されており、中部地方・東北地方にも早くに拡散しています。

この墓標の基本形態は、①尖った頂部、②上部の半円形の削り込み、③正面の枠内を彫り窪め銘文を刻み、④背面を舟底状に仕上げ、⑤基礎部には陰刻ないしは陽刻の蓮華文を表現しています。

石材は、地域によって異なり、地元産出の砂岩や凝灰岩を使用する例もみられますが、関東地方では主として安山岩を使用しています。

造立年代については、東国各地で17世紀代に主体をなして造立される様相を確認することができます。早いところで元和年間(1615年～)の紀年銘が知られ、寛永年間(1624年～)には江戸を中心としてかなり普及します。その後、寛文年間から元禄・宝永年間(1661～1710年)まで墓標の主体を成す型式であることが、近年の調査より判明しています。

最古の資料は、日蓮宗・池上本門寺(東京都大田区、第11図)および臨済宗・南泉寺(東京都北区)において、元和5(1619)年の紀年銘を有する資料が確認されています。元和期の特徴は、基礎部分が裾開きとなり、基礎表面に蓮華文を陰刻で表現する点です。



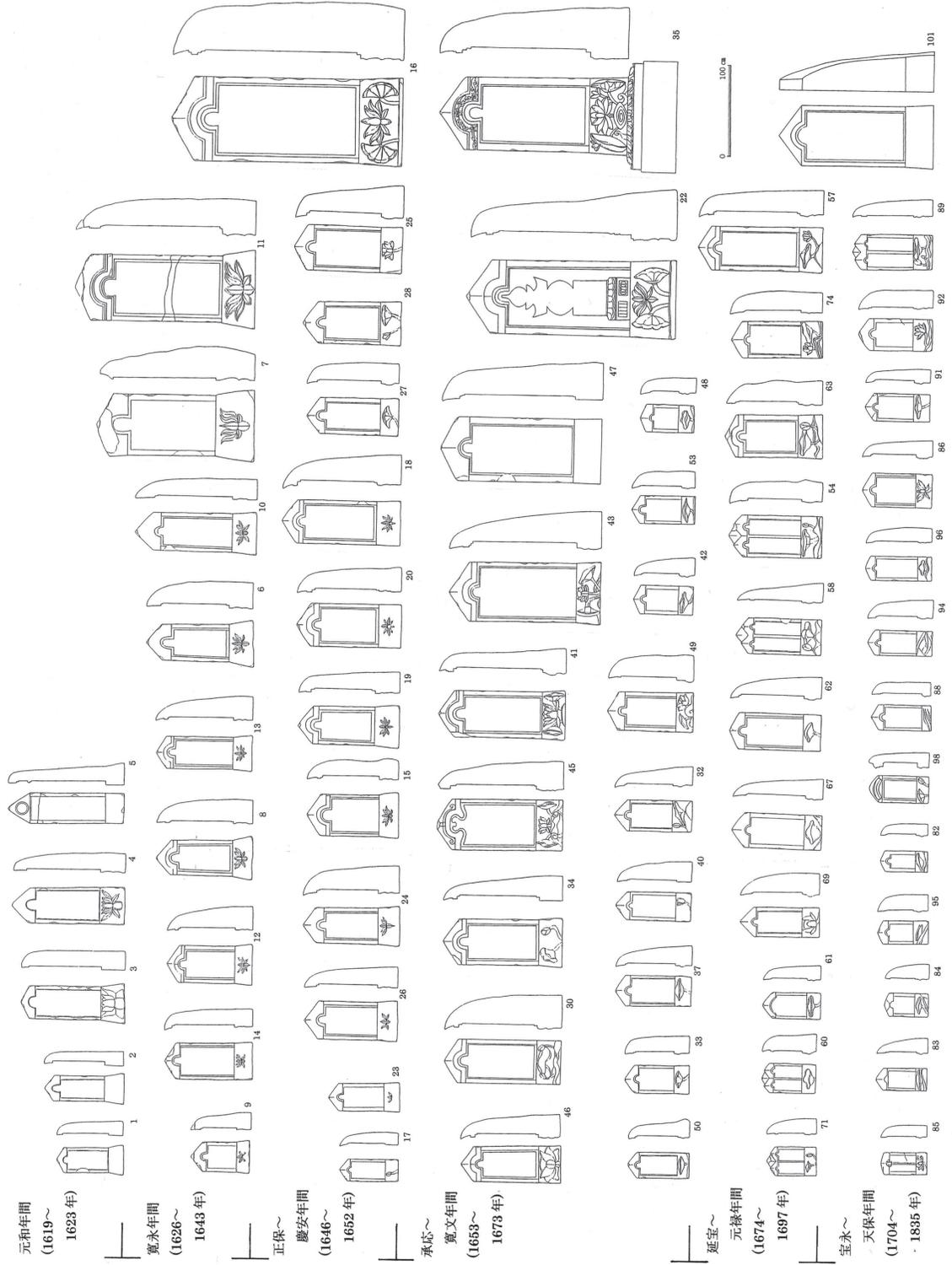
第10図 池上本門寺境内墓地の尖頂舟形墓標

池上本門寺境内では、300基以上の尖頂舟形墓標が確認されており、その内101点の実測調査を実施しています。本門寺所在資料の紀年銘は元和5(1619)年から天保6(1835)年まで確認できますが、天保6年塔は花崗岩製の特異な事例であり、実質的な造立期間は明和8(1771)年までとなります。

造立年代と形態の検討により、①元和(1619～23)、②寛永(1626～43)、③正保～慶安(1646～52)、④承応～寛文(1653～73)、⑤延宝～元禄(1674～97)、⑥宝永～明和(1704～71)の6つの画期に区切ることができます。形態は、簡素なもの(①)から、大きく精美なもの(③・④)となり、再び小さな簡素なもの(⑥)となって、終焉を迎えます(第13図)。



第11図 初期の尖頂舟形墓標
(池上本門寺・元和5年(左)/元和8年(右))



第 12 図 池上本門寺における尖頂舟形墓標の変遷



1. 福島県郡山市・善導寺



2. 東京都文京区・大門寺



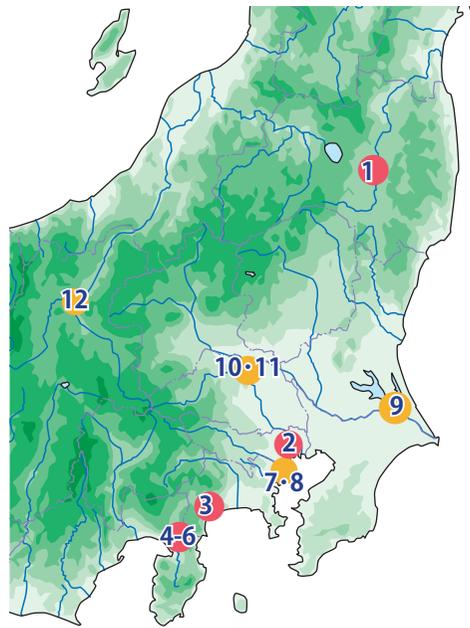
3. 神奈川県小田原市・福泉寺
(右：寛永7(1630)年)



4. 静岡県三島市・心経寺
唐破風型



5. 静岡県三島市・心経寺
(寛永12(1635)年)



7. 東京都大田区・池上本門寺
(左右：元和6(1620)年)



6. 静岡県三島市・光安寺
(寛延2(1749)年)



8. 東京都大田区・池上本門寺
(寛文2(1662)年)



9. 茨城県潮来市・浄国寺



10. 埼玉県熊谷市・集福寺
(寛文3(1663)年)



11. 埼玉県熊谷市・集福寺
(正徳3(1713)年)
連弁尖頂舟形墓標



12. 長野県上田市・芳泉寺
(元禄元(1688)年)
緑色凝灰岩

第13図 東国各地の屋弛型墓標と尖頂舟形墓標

2. 熊谷市内における近世墓石の調査

調査の経緯

当館では、平成 21 年度より、博物館の館務実習における資料収集の実践として、熊谷市内の近世墓石の調査を行っています。

埼玉県内における、石造文化財の調査については、平成 10 年に埼玉県教育委員会が行った総合的な調査があり、熊谷市内においては、旧江南町が平成 15 年に板碑の総合調査を行っています。しかし、それらは中世石造物に重点がおかれ、近世石造物についての詳細な調査は行われていない状況です。

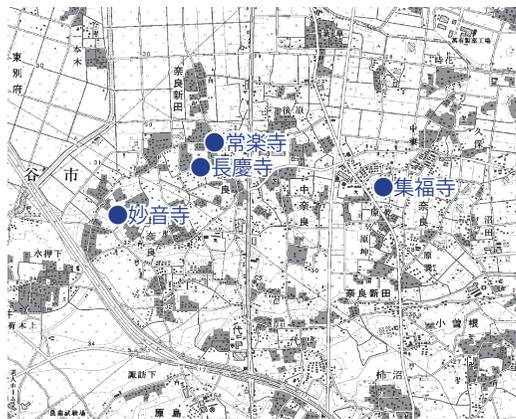
近世石造物のうち、墓石は一定量の個体数がまとまってあります。近世の墓石の悉皆調査を行うことによって、総体変遷が明らかとなり、使用された石材の流通や、石工の動態、経済的側面などの推測が可能になります。また、地域の歴史復元のための重要な資料として位置づけることができます。

墓石調査は、熊谷市北部の奈良地区（旧妻沼町）を対象として、常楽寺・長慶寺（平成 21 年度）、妙音寺（平成 23 年度）、集福寺（平成 25 年度）における各墓地にて実施しました。

これらの石造物調査によって得られた成果を紹介します。



第 14 図 妙音寺の調査の様子



第 15 図 調査寺院位置図

墓石の種類

悉皆調査を行った 4 ケ所の寺院墓地で確認した墓石は、円頂方形墓標、円頂方柱墓標、平頂方形墓標、平頂方柱墓標、尖頂方形墓標、尖頂方柱墓標、突頂方形墓標、突頂方柱墓標、舟形仏像類、仏像類、笠付方形・方柱墓標、尖頂舟形墓標（舟形墓標）、無縫塔、自然石の 16 形態がありました。（第 16 図）

各寺院の調査

常楽寺は、慶長 10（1605）年頃開山の曹洞宗の寺院です。調査対象とした墓石は、合計 432 基あり、そのうち紀年銘が明らかなものは 397 基ありました。（第 17 図）

常楽寺における江戸時代の墓石の変遷をみると、最も古い墓石は、寛永年間頃（1624 年～）に造立された尖頂舟形墓標です。紀年銘が判読可能な尖頂舟形墓標の基数は、少ないものの、寛永年間～享保年間までの造立期間からみて他の墓標に先行する墓標であることがわかります。尖頂舟形墓標より少し遅れて慶安年間頃（1648 年～）から、背面を舟底のように丸く仕上げ、正面は光背に地藏や観音を肉彫りし

た舟形仏像類が造立されはじめます。元禄・宝永年間頃（1688年～）になると、尖頂舟形墓標や舟形仏像類に代わって、円頂方形墓標や平頂方形墓標が増加しはじめ、幕末まで主流の墓標として造立されていたことがわかります。

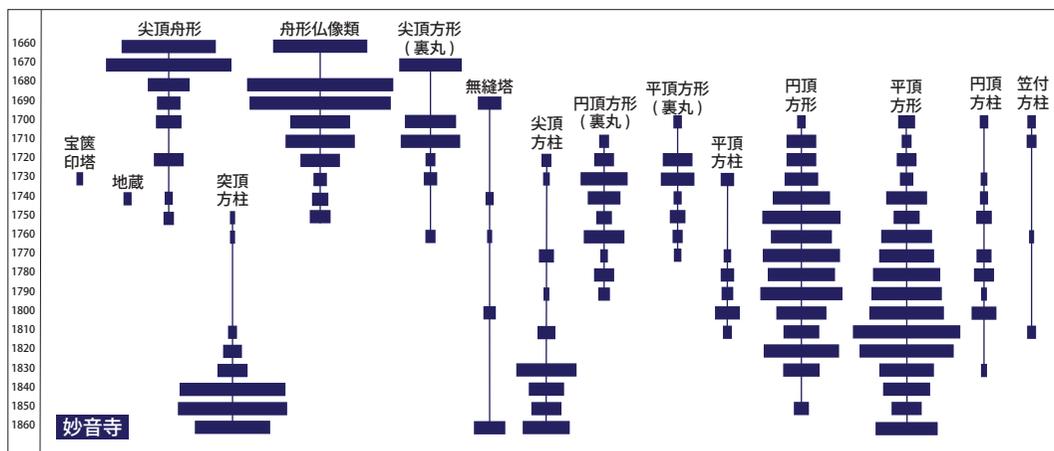
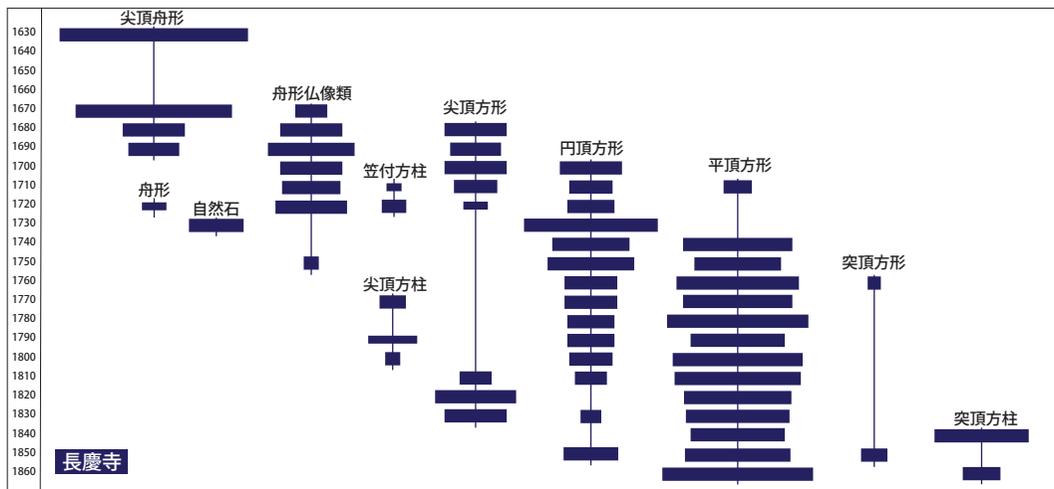
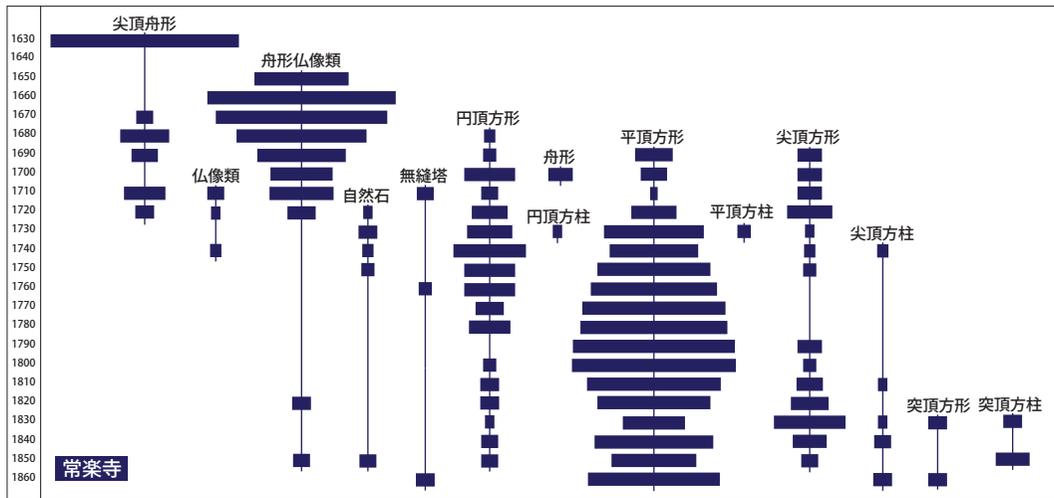
長慶寺は、真言宗の寺院で、常楽寺より南西約200mに所在します。調査対象とした墓石は192基あり、そのうち紀年銘が明確なものは180基ありました。江戸時代の墓石の変遷は、常楽寺とほぼ同じ結果となりました。しかし、常楽寺に比べ長慶寺は、舟形仏像類の出現が若干遅く、寛文年間頃（1661年～）に認められます。また、円頂方形墓標や平頂方形墓標が増加し始める前に、尖頂方形墓標が先行して造立されています。

妙音寺は、真言宗の寺院で、墓地には、江戸

期から現代に至る700基を超える墓石があります。このうち、江戸期の紀年銘が明確に確認できるものは、403基ありました。墓石の変遷は、寛文年間頃（1661年～）に尖頂舟形墓標と舟形仏像類が確認されています。以降、円頂方形墓標・平頂方形墓標→突頂方柱墓標の変遷は、常楽寺・長慶寺と同じになります。しかし、妙音寺においては、寛文年間の終わりの1670年代頃から、頂部は尖頂や円頂で背面を丸く仕上げた墓標（舟形など）がみられます。またこれらのなかには、後述する墓標の下部に3弁の連弁を表現し、3弁の間に2つの間弁を入れる熊谷市域特有の墓標が含まれています。妙音寺は、墓地面積も広く、墓標の数も多いこともあり、円頂方柱墓標や笠付方柱墓標など、多くの形態を有する墓標が確認できました。



第16図 熊谷市域における近世墓石の型式



100%

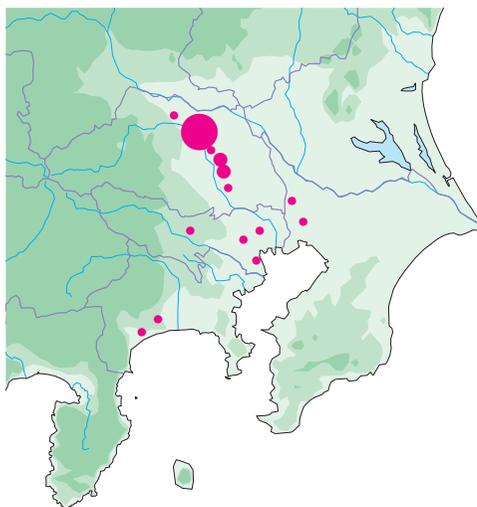
第17図 熊谷市内における墓石型式の変遷(セリエーション)

熊谷の特徴的な墓石

一連の調査により熊谷市域において確認できた、特徴的な尖頂舟形墓標を紹介します。

尖頂舟形墓標の基本形は、前述のとおり①尖った頂部、②上部の半円形の削り込み、③正面の枠内を彫り窪め、④背面を舟底状に仕上げ、⑤基礎部には陰刻ないしは陽刻の蓮華文を表現していますが、熊谷市域の墓地において確認できる尖頂舟形墓標のいくつかには、⑤の蓮華文に代わって、3弁の連弁を表現し、3弁の間に2つの間弁を入れる「連弁尖頂舟形墓標」がみられます。

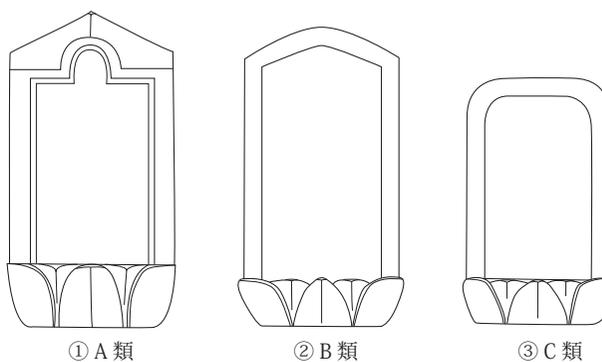
この「連弁尖頂舟形墓標」はA～Cの3類型に分けることができます(第19図)。造立時期は、尖頂舟形墓標の基本的要素に連弁が付けられたA類連弁尖頂舟形墓標(第19図①)が古く、寛文元(1661)年～宝永9(1709)年に確認できます。また、上部の半円形の削り込みが略されたB類連弁尖頂舟形墓標(第19図②)は、延宝7(1679)年から延享2(1745)年まで造立されています。さらに、頂部が平らとなったC類連弁尖頂舟形墓標(第19図③)は、宝永2(1705)年～元文元(1736)年の間に数基確認されています。これらの3種類の連弁尖頂舟形墓標は、A類→B類→C類と変遷していることがわかります。



第18図 連弁尖頂舟形墓標の分布

連弁尖頂舟形墓標の類例は、関東各地の墓地に確認できますが、熊谷市域ほど集中する地域はありません。

中山道熊谷宿を中心とする地区は、江戸時代初期に宝篋印塔製作に独自の型式を表しています。また、江戸時代には境内に衆生救済を目的とした大形石塔の造立が行われますが、熊谷市域では、一般的な宝篋印塔ではなく、独特の宝塔が造立されています。いずれも、熊谷の石工活動の独自の様相を示すもので、連弁尖頂舟形墓標の分布は、墓石の製作にもその影響が少なからずあったことを物語っています。



第19図 連弁尖頂舟形墓標

集福寺・吉田家墓所の調査

熊谷市下奈良に所在する曹洞宗の萬頂山集福寺の境内墓地には、四方寺村に居住した近世土豪百姓として、地域の経済・社会に多大な影響力を発揮した吉田家の墓所が営まれています。吉田家は戦国期に忍城主の成田下総守長康に仕え、忍城落城後の天正期に土着し、近世には醸造業などを営んで地域経済を主導してきました。初代宗道の子の男子3人は茂左衛門家、六左衛門家、藤右衛門家の三家を慶長期までに四方寺村内におこしています。

このうち茂左衛門家と六左衛門家の両家が四方寺村の名主をつとめ、村内の屋敷の位置により茂左衛門家が「御西」、六左衛門家が「御東」と呼ばれてきました。

東吉田家墓所の様相

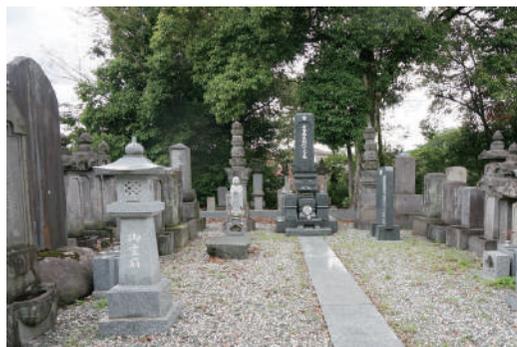
集福寺の境内墓地には、吉田家一門の墓所が複数箇所に営まれており、ここに紹介する御東の東吉田家、御西の西吉田家以外にもそれぞれの分家筋の墓所が所在しています。東吉田家墓所は、境内墓所の中央部分に、幅850cm、奥行き950cmほどを測る区画(≒25坪)で整備されています。区画内正面奥には現在の「吉田家先祖代々之墓」が配置され、この左右には最古の造立年代を示す2基の宝篋印塔が位置しています。(第21図)

この前方に左右二列ずつに墓石が再配置されており、墓石の総数は2基の顕彰碑を含めて46基を数えることができ、多くは安山岩を石材として使用していますが一部の小形墓標には砂岩など軟質な石材を用いています。

造立された墓石型式は、宝篋印塔3基、尖頂舟形墓標3基、笠付方形墓標17基、突頂方柱墓標11基、平頂方柱墓標1基、尖頂方柱墓標1基、尖頂方形墓標3基、平頂方形墓標3基、円頂方形墓標1基、地蔵1基です。

これら10種類に及ぶ墓石型式の違いは、家族内における当主墓を最上位とする被葬者の立場の違いを表出しています。墓石に刻まれた銘文をもとに歴代当主および当主妻の墓を確認すると、初代・2代は宝篋印塔、3代は尖頂舟形墓標、4～6・8・10代は笠付方形墓標、7・11～14代は突頂方柱墓標、9代は平頂方柱墓標となります。

初代から6代までが当主と当主妻それぞれの墓石を別に造立した個人墓を造立するのに対



第20図 東吉田家墓所



第21図 東吉田墓所の宝篋印塔

し、7代以降は当主夫妻の戒名を並記した世代墓を基本としています。

東吉田家墓所における墓石は、歴代当主およびその妻の墓石の大きさを最大としており、宝篋印塔で232～237cm（7尺6寸～8寸）、突頂方柱墓標で123～188cmで（4尺～6尺2寸）、笠付方形墓標で150～191cm（5尺～6尺3寸）であり、時代の下降に従って小形化し当主よりは当主妻墓をやや小さくして格差を表わしています。（第24図・第2表）

笠付方形墓標は、近世墓標として一般化していません。限定された階層の墓石として採用されており、農村部にあっては多く名主階級に採用されています。東吉田家墓所においては、当主及び当主妻以外にも被葬者に従って規模を

変えて採用されています。子供の墓石で75～95cm（2尺5寸～3尺）、信士・居士・大姉の墓石で107～117cm（3尺5寸～8寸）の規模です。

また、この東吉田家墓所における注目すべき資料は、総高173cmを測る笠付方形墓標です。これは銘文により享保12（1727）年に没した5代・宗統の墓石と確認できますが、この墓石の基礎側面に「くまがや／石屋清兵衛／作之」と刻まれており重要です。（第22図）

一般に各地で活動した石工の主体を占めた仕事内容は墓石の製作であったものと想定できますが、基本的には墓石に石工名を刻むことは無く、石工名は墓石以外の石造物に認められます。地域最有力者の墓石に刻まれた石工名は、当然ながら地域で最も腕の立つ石工であったものと思われま

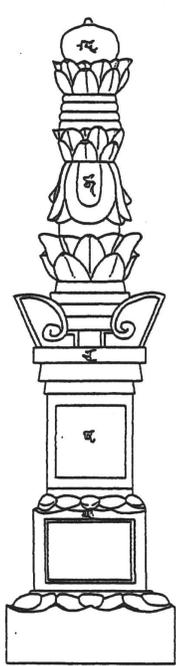
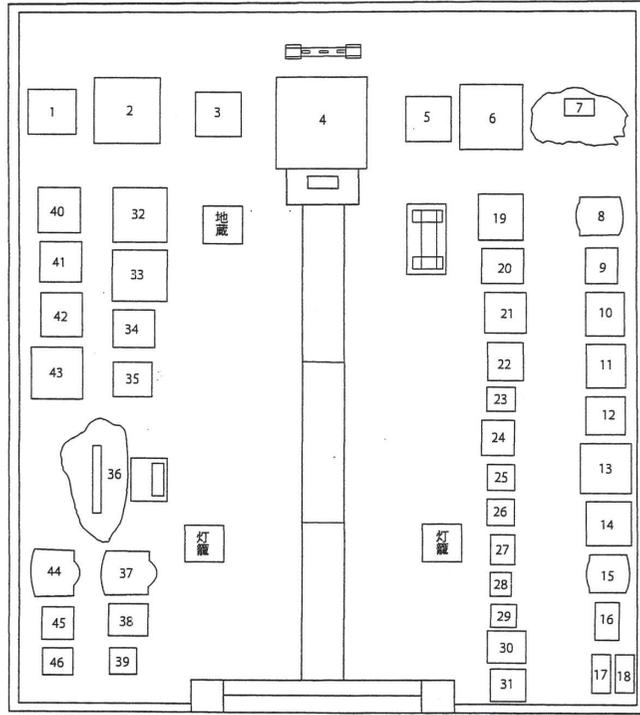
す。寄居町の昌国寺に造営された旗本6000石の水野家墓所は、歴代当主として宝篋印塔を造立していますが、このうち宝永6（1709）年に没した5代水野忠英の墓塔の基礎にも「クマガヤ石や／松井清兵衛清昌」と刻まれており、地域最有力の石工であったことを示しています。



第22図 基礎に石工名を刻む墓石



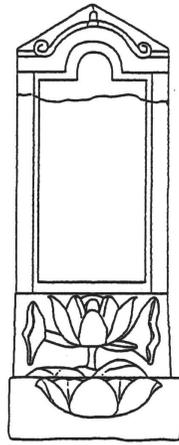
第23図 調査状況



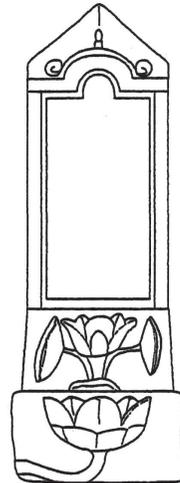
2代宗栄 3



初代宗道 5



44



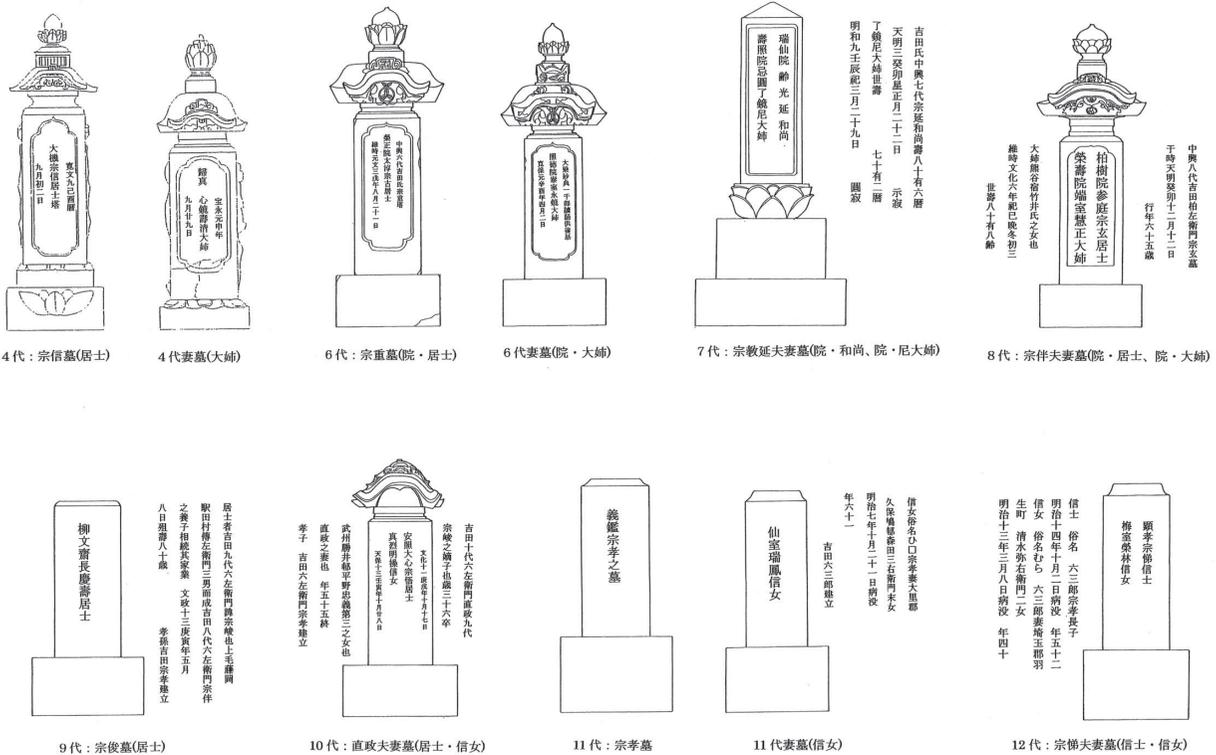
37

0 1m

第 24 図 東吉田家の平面図と墓石

番号	型式	年号	高さ	備考	戒名
1	突頂方柱	明治 14(1881) 年	138cm	12代 宗梯夫妻	信士・信女
2	突頂方柱	天明 3(1783) 年	188cm	7代 宗延夫妻	院和尚・院大姉
3	宝篋印塔	寛永 16(1639) 年	232cm	2代 宗栄	浄覚位
5	宝篋印塔	元和 4(1618) 年	237cm	初代 宗道	禪定門
6	突頂方柱	昭和 15(1940) 年	169cm	14代 六郎夫妻	居士・大姉
8	笠付方形	寛文 9(1669) 年	191cm	4代 宗信	居士
9	笠付方形	宝永元 (1704) 年	179cm	4代 妻?	大姉
10	笠付方形	文化 6(1809) 年	177cm	8代 宗玄夫妻	院居士・院大姉
13	突頂方柱	文久 2(1862) 年	136cm	11代 宗孝	
14	突頂方柱	明治 7(1874) 年	129cm	11代 宗孝妻	信女
15	観音像	貞享 2(1685) 年	168cm	3代 妻?	大姉
16	尖頂舟形	寛文 2(1662) 年	139cm	3代 宗貞?	
32	平頂方柱	文政 13(1830) 年	125cm	9代 宗俊	居士
33	突頂方柱	明治 18(1885) 年	126cm	13代 宗哲妻	信女
41	笠付方形	元文 3(1738) 年	186cm	6代 宗重	院居士
42	笠付方形	享保 12(1727) 年	173cm	5代 宗統	居士
43	笠付方形	天保 13(1842) 年	150cm	10代 直政夫妻	居士・信女

第 2 表 東吉田家当主墓石一覽 (番号は配置順)



第 25 図 東吉田家当主夫妻墓

西吉田家墓所の様相

西吉田家の墓所は東吉田家の西側 20m ほどの地点に位置しており、幅 4 m、奥行き 20m ほどの細長い区画（≒ 25 坪）に再整理されています。この区画内に入口の左右に配置された燈籠 2 基、新造の地蔵、最奥部正面に配置された墓誌、石碑、現在の「吉田家の墓」を含めて総数 40 基の石造物が造立されています。

墓所には細長い区画の左右二列に墓石が造立されており、墓石型式としては、宝篋印塔 4 基、尖頂舟形墓標 1 基、笠付方形墓標 13 基、突頂方柱墓標 8 基、平頂方柱墓標 1 基、尖頂方柱墓標 4 基、円頂方柱墓標 2 基、尖頂方形墓標 1 基、平頂方形墓標 1 基、地蔵 1 基の総計 36 基を数えます。

墓石に確認される銘文により、歴代当主の墓石は宝篋印塔→笠付方形墓標→尖頂方柱墓標→円頂方柱墓標→突頂方柱墓標の変遷を辿る点が確認できます。中途に採用した墓石型式に若干の変容は認められるものの、宝篋印塔→笠付方形墓標→突頂方柱墓標を基本的とする点において東吉田家墓所における変遷と同じです。

西吉田家墓所においては、初代から 6 代までの当主および当主妻の墓石は個別に造立されており、寛政 2（1790）年の 7 代豊久夫妻の墓石以後は、夫妻の戒名を並記した世代墓に変遷し、昭和 7 年の 12 代に至っています。東吉田家においても天明 3（1783）年の 7 代宗延夫妻以後は夫妻世代墓を基本としており、当該期の風潮を確認できます。

吉田家墓所の総括

集福寺境内墓所に所在する両吉田家の墓所は、江戸初期の寛永年間に墓石が造立された地域屈指の来歴を誇るものであり、宝篋印塔の造立をもって造営が開始されています。その後基本的には笠付方形墓標を歴代当主墓に採用して

おり、突頂方柱墓標に至っています。

この様相は関東各地に江戸初期から造営された旗本諸家の墓所に造立された墓石の変遷に一致しており、墓石に反映された階層性と経済性を窺うことができます。

また墓石に刻まれた戒名は、東吉田家墓所では元和年間に没した初代は禅定門であり、寛永年間の 2 代で浄覚位、3～5 代は居士・大姉とします。その後 6～8 代では院号付きの居士・大姉ですが、9・10 代は居士・大姉、11～13 代は信士・信女となり、昭和初年の 14 代で居士・大姉としています。

一方、西吉田家墓所の戒名は、寛永～承応年間の初代・2 代では禅定門・禅定尼、3 代以降 13 代までは居士・大姉としており、昭和初年の 14 代に至って院号付きの居士・大姉としています。

この戒名に窺われるところは、各地の在地富裕層に多く確認される院号付戒名が限定された使用に留まっている点であり、西吉田家の居士・大姉の安定した戒名の使用に対して、東吉田家における変遷が顕著な点です。

西吉田家の歴代墓石の総高は 6～7 尺規模で安定しているのに対し、東吉田家の歴代墓石は戒名の変遷に従って院号付の 6～8 代で総高 6 尺ほどを基本としており、居士・大姉の 9・10 代で 4～5 尺であり、信士・信女の 11～13 代では 4 尺代を基本としています。

この墓石規模および戒名の変遷は、地域最有力の富裕層としては異例の様相と理解され、地域社会内部における秩序以外の外からの規制の存在を暗示させます。留意されるところは、10 代直政夫妻の世代墓であり、一般的な居士・大姉の組合せに対して居士・信女とする点であり、以後 11～13 代では信士・信女の戒名を使用しています。

これは「近來百姓町人共身分不相應大造之葬式致し、又者墓所江壮大之石碑を建、院號居士

號等付候趣も相聞、如何之事二候、自今已後百姓町人共葬式ハ、假令富有或者由緒有之者二而も、衆僧十人ヨリ厚修行致間敷、施物等も分限ニ應し寄附致し、墓碑之儀も高さ臺共四尺を限、戒名江院號居士號等決而附申間敷候」とする天保2（1831）年の「葬式石碑院号居士等之儀ニ付御触書」（『徳川禁令考』）の規制を遵守した具体的事例と理解することができます。

10代直政が没したのは文化11（1842）年で御触書の出る以前であり、10代直政の妻が没したのが天保13年の御触書以後であったが故に居士・信女の戒名の組合せとなったものかと考えられます。

この10代直政夫妻の墓石の総高は150cmとやや大形ですが、以後の11～13代の墓石規模は4尺を基準としており、規制を意識して小形化したものとも考えられます。武蔵榛羅郡四方寺村は江戸近郊の旗本領であったが故に、当該地の名主級の富裕層として意識的にこの規制を遵守したものかと思われます。

現在の集福寺墓地においては、無縁化した江戸期の墓石は一箇所に集積されており、この資料を含め墓地全域に展開する江戸期の紀年銘を確認できる墓石の総数は957基を数えます。

これを年代的な墓石型式の変遷として見ると、造立が開始された1620年代から1640年代までは宝篋印塔10基が主体となって、これに観音像を表わす墓標1基が認められるのみで

あり、宝篋印塔が主体を占めています。これは江戸初期においては、吉田家をはじめとする地域の限定された有力階層のみが墓所を営み得たことを表わすものと判断できます。

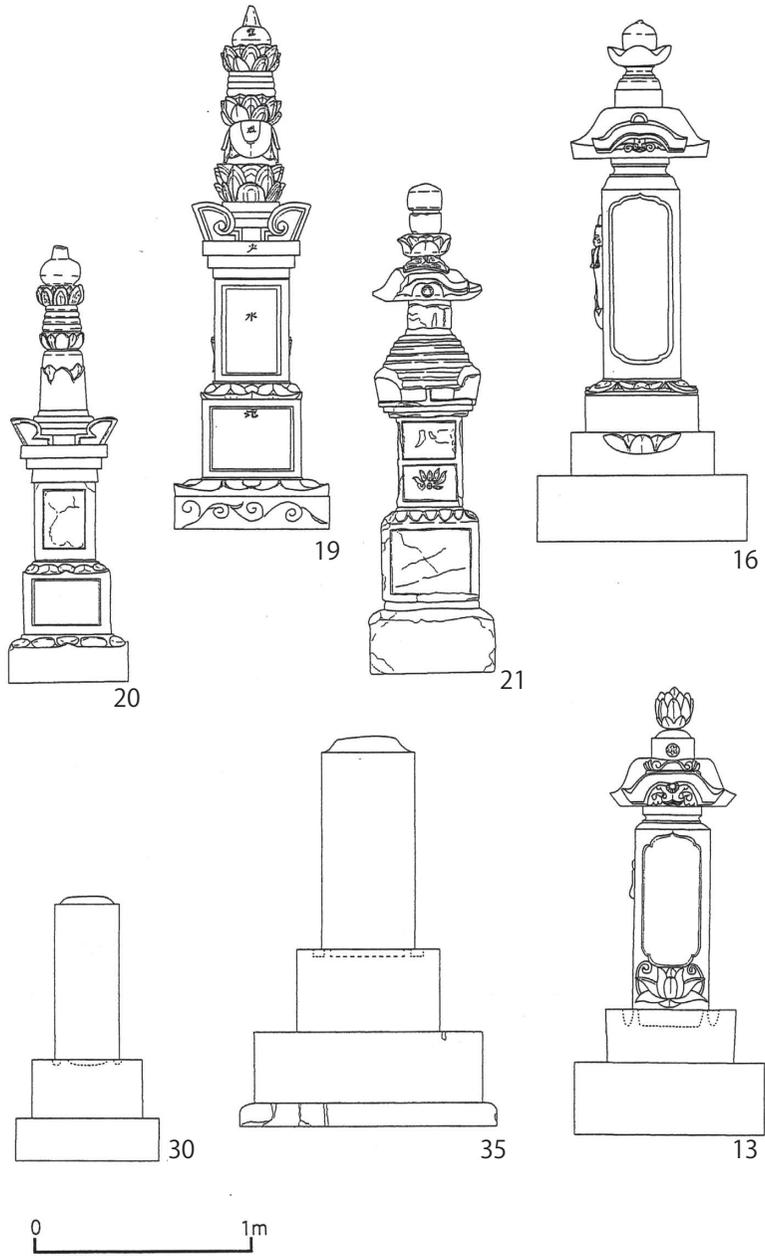
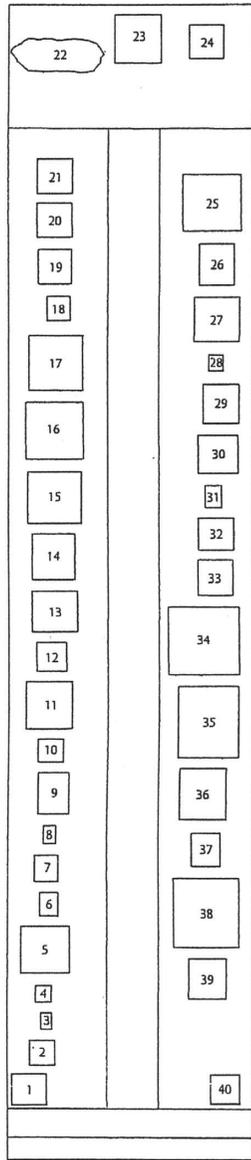
有力階層が宝篋印塔に代わって採用した墓石型式が笠付方形墓標であり、1660年代に初現した後、数を減少させながら1850年代まで継続して造立されています。1820年代から尖頂方柱墓標が主体を占め、1860年代では突頂方柱墓標が主体をなして明治期に至っています。

この有力階層の墓石の様相に対し、一般階層では尖頂舟形墓標が1660年代から1700年代まで主体を占め、1650年代に初現した円頂方形墓標が1710年代から幕末まで主体を占めています。この両型式の墓標の変遷の間に、頂部を円くし背面を丸く舟底状に仕上げた円頂舟形墓標が一定量造立されており、1660年代から幕末まで頂部を尖らせた尖頂方形墓標が弱小型式として継続して造立されています。

江戸周辺の地域において、尖頂舟形墓標から円頂方形墓標への墓石型式の変遷は基本的変遷として確認できるどころであり、その後に方柱型式が主体を担って明治期に及んでいます。熊谷周辺地区においては、円頂方形墓標の頂部が平坦化した平頂方形墓標が圧倒しており、この型式が幕末まで主体を占める点もまた地域の特徴として認識できます。



第26図 西吉田家墓所



第 27 図 西吉田家の平面図と墓石

3. 江戸時代の墓誌

墓誌とは墳墓に埋納された、被葬者の姓名、経歴、没年、事績を後世に伝えるために記して墓に埋めたものであり、わが国では古代の墳墓に伴う資料から始ります。

古代の墳墓に伴う墓誌は官人・僧侶階層のものが知られています。668年の紀年銘を有する小野毛人の銅板製短冊形の墓誌を最古として、延暦3（784）年の紀吉継の埴製合せ蓋形式の墓誌に至る17例の資料が確認されており、一定の普及状況が確認できます。

東アジア世界における墳墓への墓誌の埋納は、中国の漢代に起源して周辺諸国に広まったものです。中国の墓誌は、方形の石製のものに墓誌銘を刻み載頭四角錐形の蓋石を伴うものを基本としています。日本古代の墓誌の形状は、火葬骨蔵器に直接刻む資料は別として、金属製の短冊形を呈するものが主体をなしていますが、これは中国において高い身分人の埋葬時に諡号を奉る文章を刻んだ諡冊、哀悼の文章を刻んだ哀冊とよばれるものに起源することが想定されています。

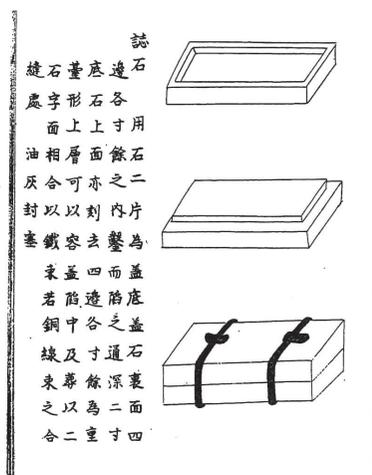
日本において奈良時代以後、長く使用が絶えていた墓誌は、江戸時代になって墳墓への埋納が復活します。この背景には、江戸時代に幕府によって封建支配のための思想として儒教、特に朱子学が採用されたことが要因になったものと考えられます。江戸時代は寺請制度によって民衆は寺院の檀家となり埋葬も仏教に従って行われましたが、最近の研究によって仏教的埋葬法のなかに儒教に則った埋葬、儒葬の影響が見られることが明らかになっています。

江戸時代の埋葬に影響を与えた儒葬の基本は、南宋時代に成立した朱熹による『家礼』であったものと考えられています。この中には埋葬施設としての「灰隔^{はいかく}」の様子が記されており、

近時各地で発掘調査されて明確になってきた大名墓の地下埋葬施設が、ここに記された構築法に従ったものと想定されています。また石製方形・合せ蓋式の「誌石」の様も記されており、江戸時代に復活した墳墓への墓誌埋納も儒葬の影響と考えられています。

江戸時代は寺請制度であったために制度としての儒葬が広く定着することはなかったのですが、一部の大家、儒者にとっては儒葬が実践されています。このため儒者によって『家礼』に基づいた葬儀次第が作られています。

寛文7（1667）年の熊沢蕃山の「葬祭辨論」には「幾百年して他人のあやまり掘りおこさんことを慮りて、其人の氏又は出処を有増石に彫りて石二枚をうちあわせ誌石と名付、棺の上又は其辺に埋むなり」としています。元禄3（1690）年に成った中村惕斎の『慎終疏節』には、誌石について横長の図を添えて「用石二片為蓋底、蓋石裏面四辺各寸餘之内鑿而陷之通深二寸、底石上面亦刻去四辺各寸餘之為重台、形上層可以容蓋陷中、及葬以二石字而相合、以鉄束若銅線束之合縫處、油灰封塞」とあります。ここに元禄期の儒者にとっては、長方形の合せ蓋式の



第28図 『慎終疏節』に描かれた誌石
（『慎終疏節』より転載）

誌石が基本的なものと認識されていたことを確認することができます。

しかしながら石田肇氏・谷川章雄氏の集成研究によれば、各地の墳墓から出土している誌石は、長方形の合せ蓋式に限るものではありません。芝増上寺と上野寛永寺で知られる將軍家墓所では複数の縦長の石室の蓋石内面に墓誌銘を刻む資料が知られ、三田濟海寺の越後長岡7万石の藩主の牧野家墓所では、歴代当主の墳墓に銅板製の墓誌を埋納しています。

さらには合せ蓋式ではなく板石1枚に墓誌銘を記す資料も多く確認されています。

基本例として儒者によって示された合せ蓋式の誌石は、当然のことながら儒者の墳墓から出土しているほか、大名墓、有力武家の墓などからの出土が確認できます。

この種の誌石がまとめて出土したのは、①高輪泉岳寺の織田家墓所、②牛籠別荘内の林家墓所、③谷中善性寺の越智松平家墓所、の3箇所が知られています。

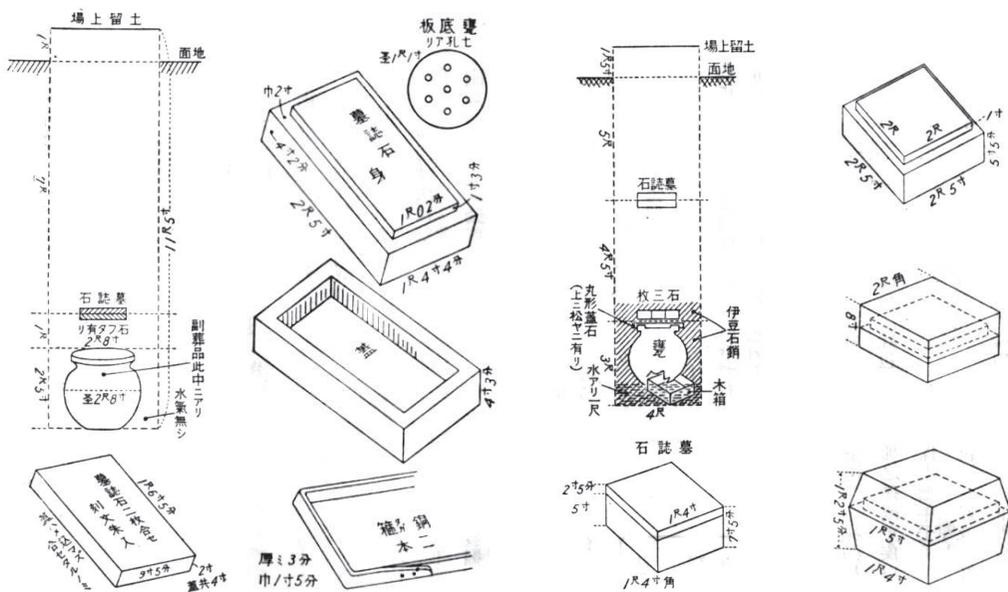
①の織田家墓所は、織田信長の弟の長益(有楽斎)の4男長政の子孫の大和芝村藩1万石の

藩主墓所であり、墓誌は昭和11年に改葬された際の出土資料です。正徳4(1714)年に没した5代長弘の墓誌を最古として、6代長亮室、7代輔宣、7代輔宣弟、8代長教、9代長宇室、嘉永3(1850)年に没した11代長易室の7例が報告されています。

いずれも蓋が凹形、身が凸形の合せ蓋式の誌石ですが、年代的に古い3例が縦長の長方形、新しい4例が正方形の形状に変化しています。これは、後半代に至って日本の誌石の規範とされた中国の誌石に類似する形状に変化したものとも考えることができます。

②の林家墓所は、もと1,000坪を誇った広大な牛籠別荘内の一面に設けられたものが、現在は120坪に縮小しており、史跡整備に伴って調査されています。14点の墓誌が知られており、このうちの10点が合せ蓋式のもので、これらのうち最古の年代を示すのは林家3世の鳳岡の享保17(1732)年の墓誌であり、最新の年代は天保10(1839)年の9世林檉宇の後配貞静孺人の墓誌で確認できます。

14点の墓誌のうち13点の墓誌は、横長



第29図 織田家墓所出土の墓誌(『掃苔』第6巻第3号より転載)

の形状で造形する特徴を有しています。横幅36～76cm、縦29～48cmであり、武家の墓誌とは際立って異なった特徴を示しています。

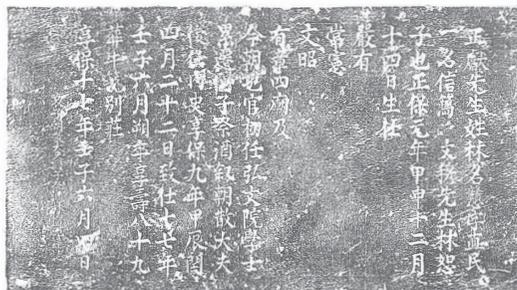
③の谷中善性寺の越智松平家墓所出土資料は昭和35年に整理・改葬された時の出土資料です。越智松平家の墓誌で全容が知られる資料は、合せ蓋式のものを中心とする、寛保2（1742）年から慶應2（1866）年までの10点を数えます。これらの資料については後述します。

現在確認できる最古の年代の墓誌を記した誌石は、京都・円光寺にある儒者の鵜飼石齋のもので、誌石は寛文4（1664）年の、横幅52cm、縦35cmの合せ蓋式のもので、20行516字の詳細な内容を記しています。これ以前には火葬骨などを納めた骨蔵器に墓誌銘を記した銘骨蔵器が知られていますが、誌石に記されてはいません。

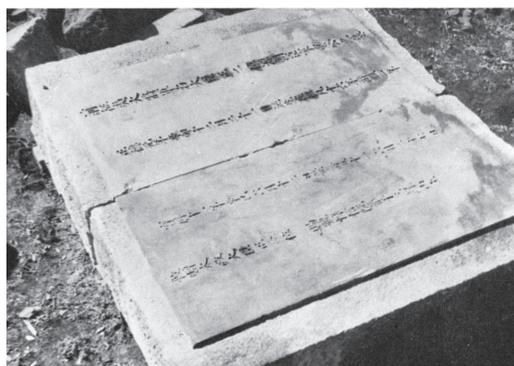
徳川将軍家では延宝6（1678）年に没した綱重の墓誌が確認最古例であり、埋葬施設である石室の蓋石の内面に刻んだ3行41字の簡略な内容を記したものです。将軍墓としては正徳2（1712）年に没した6代家宣の墓誌が最も古いものですが、文献史料からは、延宝8（1680）年に没した4代家綱に遡る可能性が高いことが指摘されています。

また水戸徳川家では、水戸光圀が万治元（1658）年に没した夫人を葬るに儒葬を以てしたのを嚆矢として、寛文元（1661）年に没した父頼房を儒葬に基づいた広大な瑞龍山墓所に埋葬しています。史料には水戸光圀が撰文した「故水戸侯正三位権中納言源威公墓誌」、同じく寛文元年に没した「靖定夫人谷氏墓誌」などが知られ、水戸徳川家においては墳墓に墓誌を埋納する風習があったものと考えられています。

これら儒者、将軍家、大名家における様相からは、江戸初期の寛文・延宝年間（1664～1680）に墳墓への墓誌埋納が始ったことを確認することができます。



第30図 林鳳岡の墓誌
 (『国史跡林氏墓地調査報告書』より転載)



第31図 徳川家宣の墓誌
 (『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』より転載)



第32図 浄観院（12代将軍家慶正室）の墓誌
 (『東叡山寛永寺徳川将軍御裏方霊廟』より転載)

善性寺の墓誌

立正大学博物館には蓋と身がセットとなる墓誌が収蔵されています（展示資料）。これは昭和35年に行われた日蓮宗善性寺（東京都荒川区）の越智松平家墓所の整理・改葬にもなっており、出土したものの一部です。

越智松平家は、甲府藩主徳川綱重の次男の清武に始まる親藩です。5代将軍綱吉の晩年に館林藩主として取り立てられ、兄の家宣が6代将軍となると5万4千石に加増されています。善性寺の越智松平家墓所は、清武の母の保良（長昌院）が埋葬されたことにより造営が始り、歴代の当主・当主室などの一族が埋葬されました。なお長昌院は、子の家宣が6代将軍になると上野寛永寺に改葬されています。

区画整理事業に伴って越智松平家墓所は改葬・縮小され、現在は初代清武の墓と、43霊を合祀した「松平家諸霊之墓」が並列しています。初代清武の墓は「本賢院従四位下行侍従弘毅齋墓」と表されており、側面には「弘毅齋姓源松平氏清武右近将監／櫻邸之支子也母／贈従一位長昌院殿大夫人以寛文三年癸卯十／月二十日生初有故養於越智氏後奉／命復姓為上野國館林城主享保九年甲辰九月／十六日病卒享年六十有二葬于谷中善性寺」と刻んでいます。

「松平家諸霊之墓」の周囲に9点（身と蓋が組み合うものは1点とした）の墓誌が配置されているほか、墓石の基礎中に数点の墓誌の破片が混在しており、本来はすべての埋葬施設に墓誌が伴っていたことも考えられます。

越智松平家の墓誌で全容が知れる資料は、立正大学博物館所蔵品を含めて10点を数えます。これらのうち凹形の蓋と凸形の身が組み合わさる合せ蓋式の資料は8点であり、3点が蓋と身が組み合わさって確認できます。2点の墓誌は凸形ではなく平坦面に墓誌銘を刻むものですが、側面に蓋を合わせた痕跡を認めることができ蓋を伴っていたものと考えられます。いずれも縦長の形状であり、幅33～58cm（1尺1寸～1尺9寸）、長さ49～78cm（1尺6寸～2尺6寸）の大きさのものです。

これら10点のうち最古の年代が確認できるのは、寛保2（1742）年に没した3代武元の夫人・政（順善院）の墓誌です。最新の資料は慶應2（1866）年の、8代武聰の生母山野辺氏の墓誌です。これら10点の墓誌の墓誌銘から確認できる系譜は、A・3代当主武元関連のもの4点、B・4代武寛関連のもの2点、C・5代斉厚関連のもの3点、D・7代武成に関連するもの1点です。

Aは、①・安永8（1779）年に64歳で没し



第33図 善性寺の越智松平家墓所

た3代当主武元の墓誌(3)、②・寛保2(1742)年に25歳で亡くなった桑名城主松平忠雅の娘で武元夫人の政(順善院)の墓誌(8)、③・没年は不明ですが早世した政の子の熊次郎(祥麟院)の墓誌(9)、④・延享元(1744)年に8歳で没した武元と側室佐分利氏との間の子の孝次郎(桓淑院)の墓誌(1+2)です。

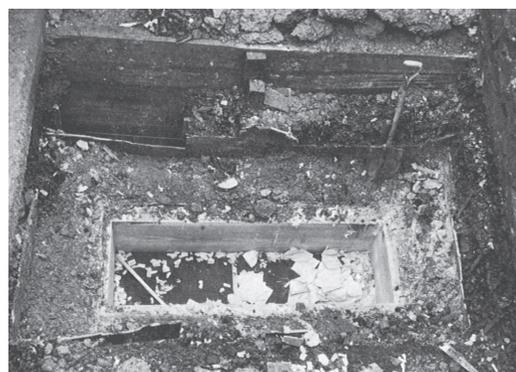
Bは、①・天明4(1784)年に31歳で没した4代武寛の墓誌(10)、②・没年は不明ですが3代武元の側室で4代武寛の生母の石井氏の墓誌(11)です。

Cは、①・天保8(1837)年に51歳で没した、肥前松浦静山の娘で5代斉厚の夫人・京の墓誌(14+15)、②・嘉永3(1850)年に43歳で没した5代斉厚の子・久(榮智院)の墓誌(4+5)、③・万延元(1860)年に36歳で没した、6代武揚の夫人となった5代斉厚の子・敬(敬乗院)の墓誌(6)です。

Dは、慶應2(1866)年に51歳で没した8代水戸の徳川斉昭の側室で、8代武聰生母の山野辺氏(徳潤院)の墓誌(7)です。このほかに2

点の墓誌の破片が確認できますが、被葬者を特定することはできません。

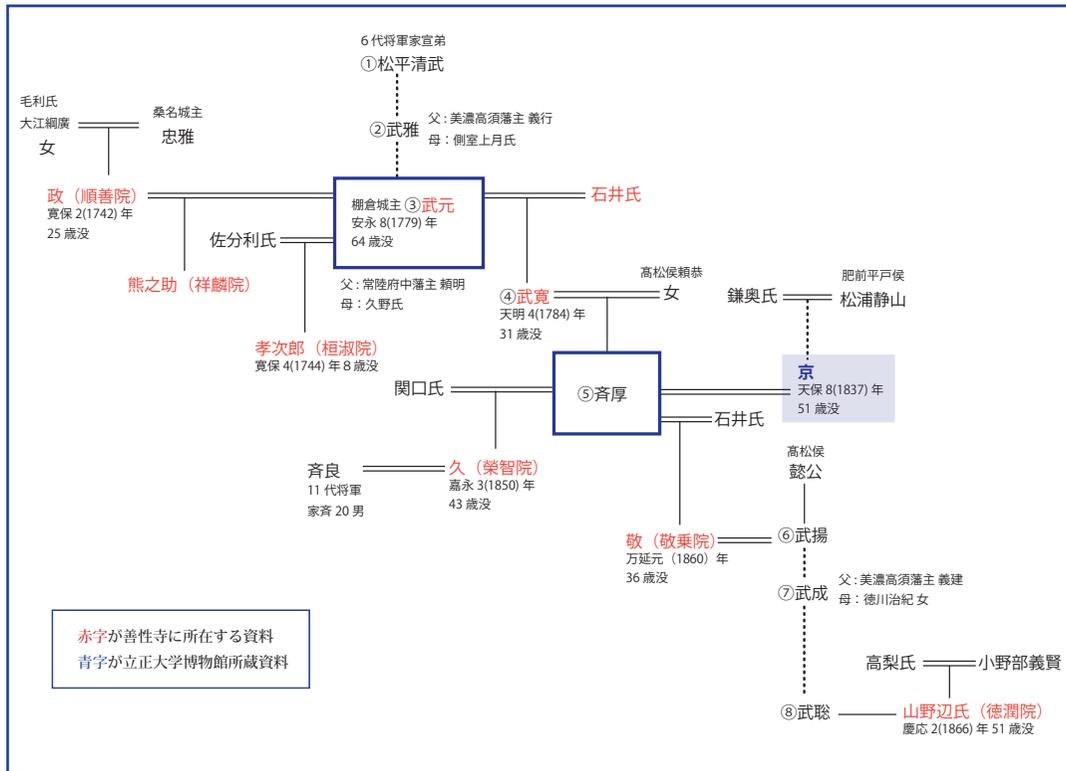
以上の善性寺・越智松平家墓誌から窺えることは、墳墓への墓誌の埋納は身分に付随するものではなく、また仏教の宗派に特定されるものでもなく、個別の家に起因するという点です。各地で調査されている大名墓に必ず墓誌が伴うものではなく、日蓮宗の東京都大田区池上本門寺境内墓地からは多くの大名墓などが調査されているにも係らず墓誌は出土していません。それぞれの墓誌を埋納した家ごとの背景が問題となります。



第34図 善性寺越智松平家墓所木棺出土状況
(『新版仏教考古学講座』7墳墓より転載)

番号	被葬者	年号	横幅	長さ	系譜	備考
1+2	3代子/孝次郎(桓淑院)	延享1(1744)年	40cm	57cm	A④	合せ蓋式
3	3代/武元(勇山大超院)	安永8(1779)年	59cm	68cm	A①	平坦+蓋
4+5	5代斉良夫人/久(榮智院)	嘉永3(1850)年	58cm	76cm	C②	合せ蓋式
6	6代武揚夫人/敬(敬乗院)	万延元(1860)年	58cm	78cm	C③	合せ蓋式の身
7	8代武聰生母/山野辺氏(徳潤院)	慶應2(1866)年	58cm	76cm	D	合せ蓋式の身
8	3代武元夫人/政(順善院)	寛保2(1742)年	41cm	58cm	A②	合せ蓋式の身
9	3代子/熊之助(祥麟院)		40cm	58cm	A③	合せ蓋式の身
10	4代/武寛(恒山大隆院)	天明4(1784)年	40cm	57cm	B①	平坦+蓋
11	3代武元側室/石井氏		33cm	49cm	B⑪	合せ蓋式の蓋
12	不明					破片
13	不明					破片
14+15	5代斉厚夫人/松浦氏	天保8(1837)年	44cm	61cm	C①	合わせ蓋式 立正大学博物館蔵

第3表 善性寺 越智松平家墓誌一覧



第 35 図 越智松平氏系図



第 36 図 3代当主武元の室と子(赤字は墓誌現存)

【展示資料紹介②】

越智松平家斉厚夫人の石製墓誌

博物館収蔵資料のなかから、越智松平家斉厚（上野館林藩3代・石見浜田藩初代）夫人の石製墓誌を紹介します。

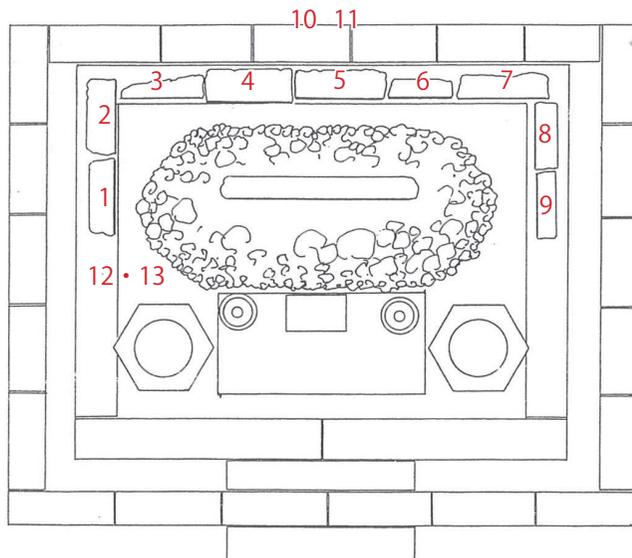
この墓誌は安山岩製で、凸状の身と、凹状の蓋の2石を重ねる合せ蓋式のもので、

身（墓誌番号15）は縦61cm、横44cm、厚さ10.9cmで、内面の凸部に右ページに示した墓誌銘を刻んでいます。

蓋（墓誌番号14）は、下3分の1を欠損していますが、横が44cm、厚さ8cm、縦は身と同じ61cmであったと思われます。蓋の外面上部には「上」と、墓誌の上下を示す刻字が認められます。内面の凹部には「夫人松浦氏之〔墓〕／此下に柩阿りあわれみ〔て〕／不る事なかれ」と刻まれています。

と刻まれています。

本資料の被葬者については、蓋の銘文より松浦氏の出自であることがわかります。身には家臣の竹腰長義の撰文により、詳しい経歴が刻まれています。それによれば、夫人の諱は京といい、源清公（松浦静山、肥前国平戸藩第9代藩主）の第4子として、側室の鎌奥氏との間に天明7(1787)年2月12日に平戸城で生まれ、石見浜田藩主松平斉厚の正室となりました。しかし、斉厚との間に子はなく、上総介斉良（11代将軍徳川家斉の二十男）を養子としました。天保8(1837)年に病に罹り、医療の甲斐無く51歳で卒し、谷中善性寺の一族の墓域に葬られたことがわかります。



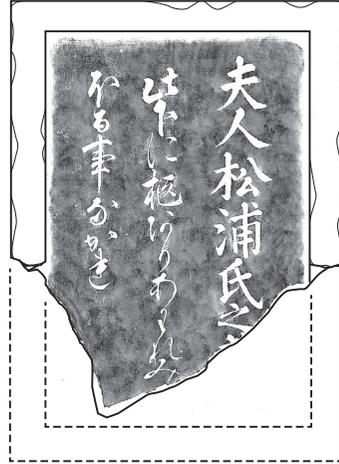
第 37 図 松平家墓所における墓誌の配置図

※当館所在資料は、最後に14・15としました。
(下図は『江戸大名墓総覧』より転載)



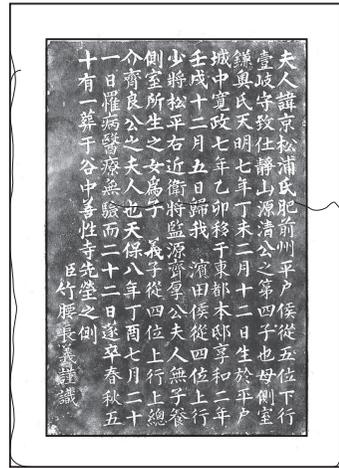
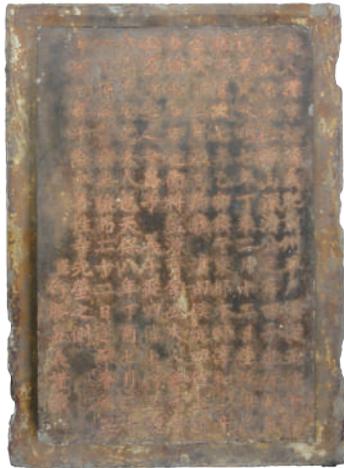
第 38 図 墓誌所在状況

14



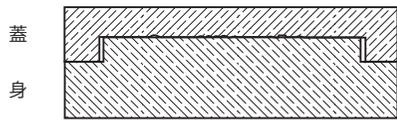
蓋内面

15



身内面

夫人諱京松浦氏肥前州平戸侯從五位下行
壹岐守致仕靜山源清公之第四子也母側室
鎌與氏天明七年丁未二月十二日生於平戸
城中寬政七年乙卯移于東都本邸享和二年
壬戌十一月五日歸我 瀧田侯從四位上行
少將松平右近衛將監源齋厚公夫人無子養
側室所生之女爲子 義子從四位上行上總
介齋良公之夫人也天保八年丁酉七月二十
一日罹病醫療無驗而二十二日遂卒春秋五
十有一葬于谷中善性寺先塋之側
臣竹腰長義謹識



蓋
身

縮尺 1/10
0 20cm

※ 墓誌番号は第2表に対応する

第 39 図 松平齋厚夫人の墓誌

善性寺の墓誌集成



棚倉公子姓源氏松平名孝次郎曾祖故館
 林城主從四位下行侍從右近衛將監源朝臣
 本賢公祖故館林城主從五位下行肥前守
 朝臣顯德公父今棚倉城主從五位下行近
 衛將監源朝臣貞山公公子乃貞山公之第二
 子也母側室佐分利氏以元文三年戊午秋八
 月廿六日生于江城鍛冶橋内藩邸延享元年
 甲子夏四月廿八日卒于柳原別邸越美之干
 城北谷中本村善性寺先塋之側諡曰桓淑院

1

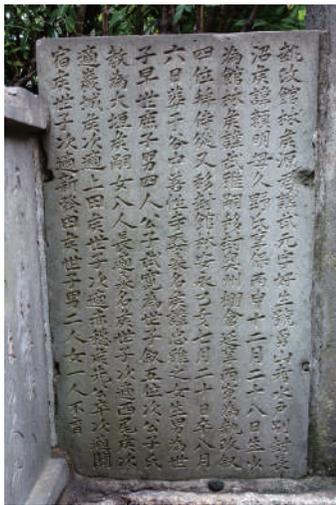
棚倉公子姓源氏松平小名孝次郎曾祖故館
 林城主從四位下行侍從右近衛將監源朝臣
 本賢公祖故館林城主從五位下行肥前守源
 朝臣顯德公父今棚倉城主從五位下行右近
 衛將監源朝臣貞山公公子乃貞山公之第二
 子也母側室佐分利氏以元文三年戊午秋八
 月廿六日生于江城鍛冶橋内藩邸延享元年
 甲子夏四月廿八日卒于柳原別邸越葬之于
 城北谷中本村善性寺先塋之側諡曰桓淑院



此下に松平氏之
 棺阿り後の人み
 だりに掘事なかれ

2

此下に松平氏之
 棺阿り後の人み
 だりに掘事なかれ

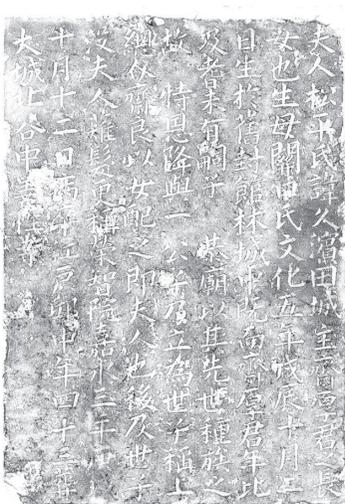


執故館林侯源君諱武元字好生號勇山考水戸別封長
 沼侯諱頼明母久野氏享保丙申十二月二十八日生火
 為館林侯諱武雅嗣移封與州棚倉延享丙寅為執收叙
 四位并侍從又移封館林安永己亥七月二十日辛八月
 六日葬于谷中善性寺娶桑名侯諱忠雅之女生男為世
 子早世庶子男四人公子武寬為世子叙五位次公子氏
 叔為大垣侯嗣女八人長適桑名侯世子次適西尾侯次
 適巖城侯次適上田侯世子次適赤穂侯先公卒次適關
 宿侯世子次適新發田侯世子男二人女一人不育

3

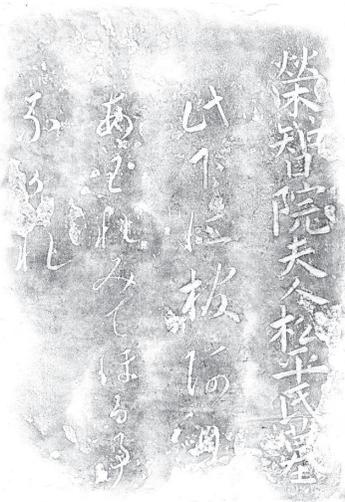
執故館林侯源君諱武元字好生號勇山考水戸別封長
 沼侯諱頼明母久野氏享保丙申十二月二十八日生少
 為館林侯諱武雅嗣移封與州棚倉延享丙寅為執收叙
 四位并侍從又移封館林安永己亥七月二十日辛八月
 六日葬于谷中善性寺娶桑名侯諱忠雅之女生男為世
 子早世庶子男四人公子武寬為世子叙五位次公子氏
 叔為大垣侯嗣女八人長適桑名侯世子次適西尾侯次
 適巖城侯次適上田侯世子次適赤穂侯先公卒次適關
 宿侯世子次適新發田侯世子男二人女一人不育

4



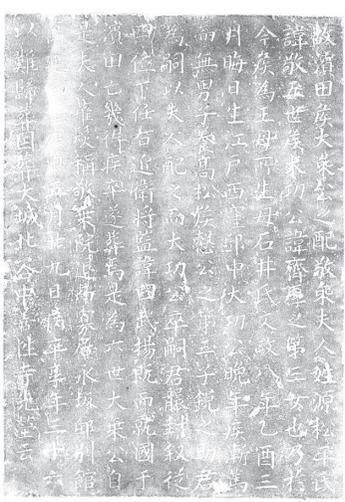
夫人松平氏諱久濱田城主齋厚君之長女也生母関氏文化五年戊辰十月二日生於舊領館林城中既而齋厚君年比及耆未有嗣子 恭廟以其先世種族之故 特恩降與一公子乃立為世子稱上總介齋良以女配之即夫人也後及世子没夫人薙髮更稱榮智院嘉永三年庚戌十月十二日病卒江戸邸中年四十三葬大城北谷中善性寺

5



榮智院夫人松平氏墓
此下に棺あり
あわれみてほる事
奈可れ

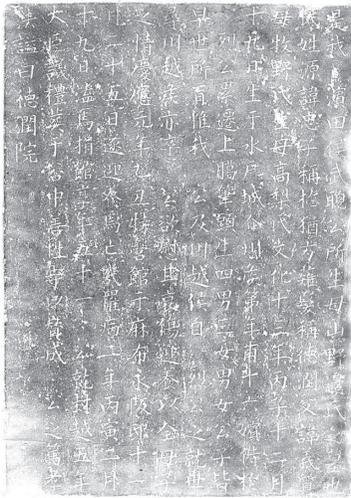
6



故濱田侯大乗公之配敬乘夫人姓源松平氏諱敬五世侯大功公諱齋厚之第三女也乃於今侯為生母所生母石井氏文政八年乙酉三月晦日生江戸西窪邸中大功公晚年疾漸篤而無男子養高松侯懿公之第三子鏡之助君為嗣以夫人配之而大功公卒嗣君襲封叙從四位下任右近衛將監諱武揚既而就國于濱田亡幾得疾卒遂葬焉是為六世大乗公自是夫人薙髮稱敬乘院退而寡居永坂別館萬延元年庚申五月廿九日病卒享年三十六以難葬國葬大城北谷中善性寺先塋云

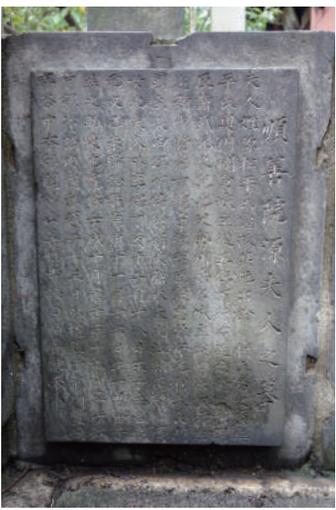
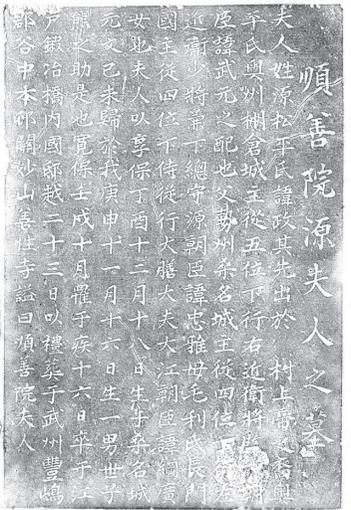
7

是我 濱田侯武聰公所生母山野辺氏之墓也
 氏姓源諱忠子稱於猶方難譽稱德潤父諱義實
 母牧野氏生母高梨氏文化十三年丙子十二月
 十九日生于水戸城介州侯第年甫十六嬪侍於
 烈公累遷上臈筆頭生四男三女男女公子皆
 早世所育惟我 公及川越侯自 烈公之就世
 尋川越侯亦卒 公欲慰其哀傷迎養以全母子
 之情慶應元年乙丑特營館于麻布永阪邸十一
 月二十五日遂迎養焉亡哉罹病二年丙寅二月
 十九日諡焉損館享年五十一 公就封越五年
 大臣議禮葬于谷中善性寺以贊成 公之篤孝
 法諡曰德潤院



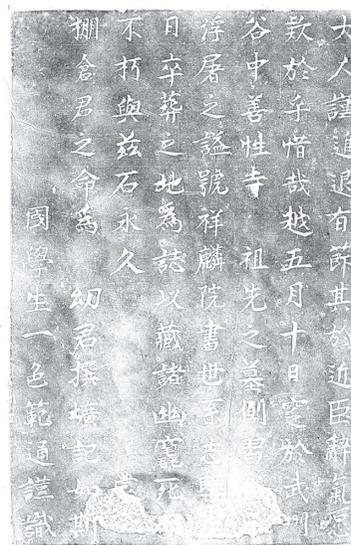
8

順善院源夫人之墓
 夫人姓源松平氏諱政其先出於 村上帝之裔與
 平氏奧州棚倉城主從五位下行右近衛將□□朝
 臣諱武元之配也父勢州桑名城主從四位□□左
 近衛少將兼下總守源朝臣諱忠雅母毛利氏長門
 國主從四位下侍從行大膳大夫大江朝臣諱綱廣
 女也夫人以享保丁酉十二月十八日生于桑名城
 元文己未歸於我庚申十一月十六日生一男世子
 熊之助是也寬保壬戌十月罹于疾十六日卒于江
 戸鍛冶橋內國邸越二十三日以禮葬于武州豐嶋
 郡谷中本郡關妙山善性寺諡曰順善院夫人



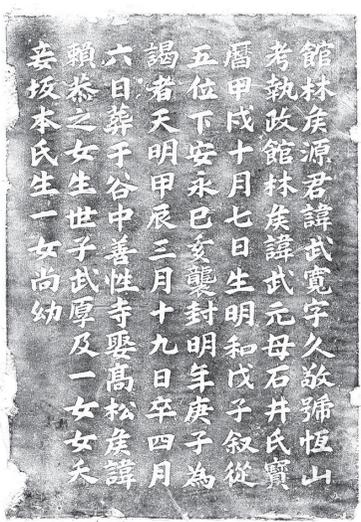
9

大人謹進退有節其於近臣辭氣懇
 欵於乎惜哉越五月十日薨於武州
 谷中善性寺 祖先之墓側習□□
 浮屠之諡號祥麟院書世系志□□
 月卒葬之地為誌以藏諸幽窆死□
 不朽與茲石永久 「一」
 棚倉君之命為 幼君撰擴記如斯
 國學生一色範通謹識



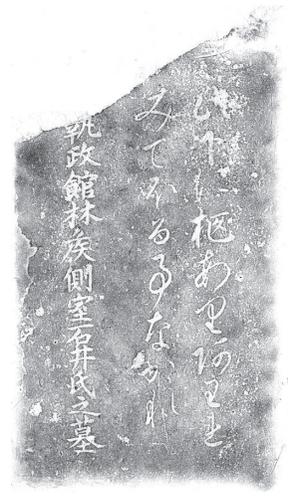
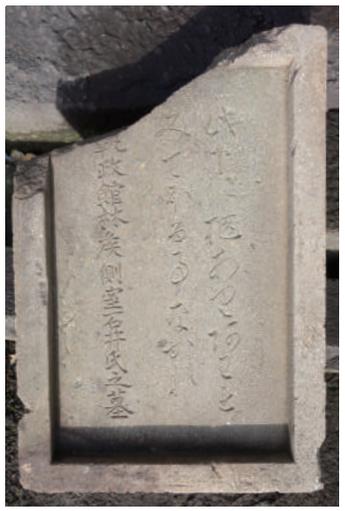
10

館林侯源君諱武寬字久敬號恒山
 考執政館林侯諱武元母石井氏寶
 曆甲戌十月七日生明和戊子叙從
 五位下安永己亥襲封明年庚子為
 謁者天明甲辰三月十九日卒四月
 六日葬于谷中善性寺娶高松侯諱
 頼恭之女生世子武厚及一女女天
 妾坂本氏生一女尚幼



11

此下に柩あり阿われ
 みてほる事なかれ
 執政館林侯側室石井氏之墓



13

「女無」
 「麻呂」



12

□生土屋氏
 □二十四日生
 □己亥六月十日
 □戸見坂本
 □谷中善性



【参考文献一覧】

- 赤星直忠 「箱根塔の沢・阿弥陀寺洞窟内の石製塔婆」『箱根の文化財』第12号 昭和52年
縣 敏夫 「板碑にみる近世墓塔の源流」『日本の石仏』第41号 昭和62年
縣 敏夫 「近世墓標の発生にみる形態について」『日本の石仏』第115号 平成17年
縣 敏夫 『図説庚申塔』播磨社 平成11年
秋元茂陽 『江戸大名墓総覧』金融界社 平成10年
池上 悟 「下総型宝篋印塔について」『立正大学人文科学研究年報』第31号 平成5年
池上 悟 「近世墓石の諸相」『立正大学人文科学研究年報』第40号 平成14年
池上 悟 「石造供養塔論攷」ニューサイエンス社 平成19年
池上 悟 「熊谷市域における廟墓の調査」『立正大学博物館年報』9 平成23年度
池上 悟 「東日本における近世墓石の調査」(立正大学仏教考古学基金：平成23年度助成報告) 平成24年
池上 悟 「東日本における近世墓石の調査・2～近世旗本墓所における墓石の変遷～」
(立正大学仏教考古学基金：平成24年度助成報告) 平成25年
池上 悟 「熊谷集福寺所在の吉田家墓所」『熊谷市史研究』第6号 平成26年
池上 年 『石塔の形式から見た津具盆地』岡崎石造美術研究所 昭和37年
石田 肇 「江戸時代の墓誌」『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編 第56号 平成19年
石田 肇 「近世大名墓の墓誌」『月刊考古学ジャーナル』ニューサイエンス社 平成21年
石田茂作監修 『新版仏教考古学講座』7墳墓 雄山閣 昭和50年
岡本桂典 「東京・池上本門寺の墓標調査(予報)」『考古学研究室彙報』第24号 昭和53年
金子智一 「高崎市周辺における近世石堂・四十九院当について」『高崎市史研究』19 平成16年
朽木 量 『墓標の民族学・考古学』慶應義塾大学出版会株式会社 平成16年
久保常晴 「鳥八白」『考古学雑誌』第31巻第1号 昭和16年
熊沢蕃山 『葬祭辨論』寛文7年
後藤守一 『墳墓の変遷』昭和7年
近藤福太郎 『服部家を偲ぶ 今治藩筆頭家老服部家墓所修復』平成9年
坂詰秀一 「石造塔婆と墓標」『中山法華経寺誌』昭和56年
関口慶久 「御府内における近世墓標の一樣相」『立正考古』第38・39号 平成12年
関口 涉 「続鳥八白二題」『野仏』第35集 平成16年
関根達人 「石廟の成立と展開」『日本考古学』第32号 平成23年
関根達人 『松前の墓石から見た近世日本』北海道出版企画センター 平成24年
鈴木尚ほか編 『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』東京大学出版会 昭和51年
竹岡俊樹 「接触による文化変容の型式学的モデル作成」『古代文化』第58巻第1号 平成18年
谷川章雄 「江戸の墓誌の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』第169集 平成23年
千々和實 「本門寺の古石塔」『大田区の文化財』2 昭和40年
千々和實 「本門寺近世初期石塔が示す江戸首都化の標識」『史誌』第3号 昭和50年
坪井良平 「山城木津惣墓標の研究」『考古学』第10巻第3号 昭和14年
中村揚斎 『慎終疏節』元禄3年
針谷浩一 「近世宝篋印塔造立背景をめぐる諸問題」『埼玉県立博物館紀要』第8・9号 昭和57年
牧野實彦 「子爵織田長繁家墓地整理記」『掃苔』第6巻第3号 昭和12年
水谷 類 「廟墓ラントウと現生浄土の思想」雄山閣 平成21年
山本定男 「十七・八世紀の区内石塔」『史誌』第22号 昭和60年
若林強斎 『家禮訓蒙疏』享保13年
南足柄市教育委員会 『南足柄市石造物調査報告書』第12集 昭和57年
伊東市教育委員会 『伊東市の石造文化財』(伊東市史調査報告 第2集) 平成17年
寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編 『東叡山寛永寺徳川將軍御裏方靈廟』吉川弘文館 平成24年
東京都新宿区教育委員会 『国史跡林氏墓地調査報告書』昭和53年

【立正大学博物館第9回特別展】近世の墓石と墓誌を探る

発行日 平成27年1月28日
編集・発行 立正大学博物館
〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700
TEL: 048-536-6150 / FAX: 048-536-6170
E-mail: museum@ris.ac.jp
URL: <http://www.ris.ac.jp/museum/>